



5分で読める大人のショート・ラブストーリー

出逢いは突然やって来る・・・

海野ごほん

もくじ

ひとつをふたりで 突然の出会いには風が吹く。夏の夕立の偶然の巡り逢いは

1977年のカーラジオ 学生時代の彼女はサーファーの僕を好きだった . . .

裸電球 女は顔じゃないという事が . . .

つがい 遠回りをして出会う運命は「つがい」のようだ . . .

七つのしたいこと メールでのやり取りは駆け引きが必要? . . .

ギャングラー物語 「陰毛を抜いてくれないか」彼は言った . . .

中年スマッシュ バドミントンの彼女は昔の . . .

春の風が吹いて 春風のいたずらが出逢いの物語の始まりだった . .

中年黄昏流星群 バーで出会った初めての彼女と . . .

海峡花火 ロマンチックな出会いは . . .

ひとつをふたりで

「ひとつをふたりで」

ここまで必要かと思えるほどの書類の束を役所に出してきた僕は、暑さと役人の対応に少々苛立ちを覚えていた。その嫌気を吹き払うかのように空を見上げると、西の空が分厚い雲で急に怪しくなり始めていた。30度を越える暑さの町は 雲を呼び込むようにさらに暑くなる。このままの流れで行けば確実に夕立が来そうだった。

「降るな、これは確実に降るな」僕は雨の匂いが嗅ぎ分けられる。

あと20分ぐらいだろ、10分後には風も強く吹いてくるはずだ。

ビルを出た僕は夏の日差しで溶けそうなアスファルトの道を歩き出す。

歩道の木陰にアクセサリーを並べて売っている少女がいた。シルバーや貝殻や鮮やかに輝くガラス玉を上手にデザインした、ユニークなものだった。赤く煌めいたピアスの光に目を奪われ、一瞬足を緩めて覗き込んでしまった。年甲斐もなく、こんな光り物に興味を持つなんて…。それに、誰かにあげるほどの彼女も今はいないのに。酔狂だろうか。

「おじさん、買ってくんない？」

今時の少女の姿をしたアクセサリー売りの女の子は綺麗な白い歯を見せて微笑んだ。ちょっと遠慮している所がかわいらしい。

「君が作ったの？」

僕は先ほど、目を引いた赤いガラス玉と白い貝殻でデザインされたピアスを手に取りながら聞いてみた。

「そう。でも今おじさんが手に持ってるのはママが作ったんだよ」

「へえ、ママも上手なんだね」

「ママの方が本職なんだ。私の先生。よく売れるんだよ」

どれがママのもので、どれが彼女が作ったものか選別できなかったが、なんとなく僕好みのアクセサリーが、ママが作ったやつだろう。彼女の年齢からすると、きっとママの年齢は僕とそう変わらないはずだ。

「自分よりママの作ったやつが売れるんだ？」

彼女はプツとした顔をして

「そんなことはないよ、私の作ったやつが良く売れるんだから」と言った。剥きになるところがかわい。

「おじさん、誰かあげる人いるの？それとも自分ですんの？」

苛められたお返しに、彼女は少々棘のある質問をしてきた。

「おじさん実はオカマだから、ホントは自分に買おうかと思ってんだ」

「え～ うそお～」

「嘘だよ。嘘に決まってるさ」

彼女はまた白い歯を見せて笑った。

「買ってもしないし自分で持ってたら何か疑われてしまいそうだな」

僕はきれいなピアスがオブジェのようで気に入った。だけど、車の中や家の中にただ見る為だけに置いといても

他の誰かが見たらやんならぬ女の忘れ物ぐらいにしか思わないだろうし、いらぬ噂を立てられるのがおちだ。

「ちょっと待ってて」彼女は僕が手に取っていたピアスを取り上げると

「おじさん携帯持ってる？」と聞いてきた。

「ああ、持ってるよ。今の世の中必需品だ。ホントはいらねーけど」

くすっと笑い、彼女は「携帯ストラップにしてあげようか？かわいいよ」

「すぐ出来るの？」

なんとなく完璧なデザインの形が崩れるのは嫌だったが何かの縁だし、そう高くないだろうし、何より彼女の笑顔がさわやかだった。

彼女はそう聞くと、返事も待たずに器用にペンチをいじり出した。後ろに置いてあったプラスチックの箱を開けると、いろんな小さいパーツごとに別れた見事に本格的なアクセサリキットが目の前に現れた。

彼女はいくつかのデザインされたストラップのうち、白い携帯用のストラップを手に取り、先ほど僕が目を奪われたピアスと合体させた。二つセットのピアスが、二つの携帯ストラップに変身した。時間は5分もかからなかった。

「二つもいらないよ。携帯は1個しか持ってないし」

そういうのもお構いなしに彼女は「誰かいい人見つけて、あげてください」と商売上手だ。

「ハイ、出来上がり。おじさん携帯貸して」と手を差し出す。

僕は言われるままに携帯を渡した。角の小さい丸い穴に器用にストラップの紐を通す。さすが、まだ若いから簡単に紐を通せる。最近では老眼のせいで、そういう仕事は時間がかかった。

「ありがとう。なんだか可愛いすぎないかい？」

「夏だからいいんだよ～」

なんとも、頼りない答えだ。けど気分がリフレッシュした。先ほどまでのエアコンが効いてない役所のビルの中で、イライラしてたのが吹き飛んだ。

「いくらなの？」僕は聞いた。

「2000円。高い？」不安そうに聞いてくる。

「ハハハ、高いといえば高い。安いといえば安い。君のママの手作りと思ったら安いのだろうけど、相場を知らないから、一応高いと言っておこう」

「じゃ、1500円・・・」

僕はまた笑ってしまった。あれだけ商売っ気があったのに、お金を貰う段になったら遠慮している。素直ないい子なんだなと思った。

「2000円でいいよ。その代わりにもうひとつは君のママにプレゼントしてあげてくれないか」

「え～、ヘンなおじさん。私のママを知ってるの？」

「知らない。だけど知らない人と同じもので結ばれてると思うと嬉しいんだ」

「・・・わかった。おじさん寂しいんだ」

いきなり、少女のような彼女に指摘されてドキッとした。

「わかった。ママにいきさつだけは話しておく。渡してみるね」そう言うと手を差し出した。

あっ、お金か・・・僕は彼女の先ほどの言葉に動揺していた。寂しいのか・・・そんなつもりじゃなく、ただなんとなく言っただけなのに心を見透かされていた。僕は財布の中から2000円を取り出すと彼女に渡した。

「おじさん、サンキュー」

またきらきらの笑顔を取り戻した彼女は片手を上げて、僕に手を振った。なんだか楽しい時間だ。

その時、地面に広げた黒い布が風に煽られた。

先ほど見た西側の雲が近づいてきたのだ。

「すぐ雨が降るよ。片付けたほうがいい。おじさんの予感当たるんだ」

僕はその女の子に言った。

「エッ、まだ明るいよ。大丈夫だよ」

「いや、すぐ来る。雨の匂いがしてるから」

ホントなのと言いながら彼女は素直に片付け始めた。黒い布地を織りながら最後の商売道具をキャリアに乗せると、大粒の雨が落ちてきた。

「キャー、ほんとだよかった。ギリギリセーフね。おじさんありがとう」

僕達は雨を避けて近くのビルに逃げ込んだ。

雨はいきなり風とともにやってきた。熱風よりも少し涼しい湿気を含んだ風だ。雨に打たれる歩道からは埃が舞い立ち、街中、埃の匂いが充満した。ただ、それは熱せられたアスファルトやコンクリートを冷やしてくれる。夕立は自然のラジエターのようなものだと感心した。

勢いよく下水口に流れ込む雨たち。僕と彼女はビルの玄関先でそれを眺めた。都会の中の自然の行為。ただ見守るしかない。どんなに作りこんだコンクリートの街でも、自然を感じることは出来る。夕立が降り。風が吹き。緑の葉が生き返る。そして、また太陽が輝きだす。ビルが立ち並ぶ、狭い空にさえ、青い空と白い雲は流れている。

自分でいつも心に自然を身にまとっていると、どんな場所でさえネイチャーだ。大自然の中で育ってきた人間、ただ、今はコンクリートの林の中にいるだけだ。それでも、僕達は自然の中で、地球に生きている。

「ねえ、おじさん。今から仕事なの」

「ああ、一応ね。今日の大事な仕事はもう終わったから、どうでもいいけど」
なんだか夕立を見ていたら、ひと休みしたくなった。

「このビルの8階に、おいしいアイスクリーム屋さんがあるんだ。行かない？」

「こんな、おじさんとでいいのか？」正直行きたくなかった。ピンクやイエローの可愛い世界の女の子の世界。ただでさえ甘いものが苦手の僕は、アイスクリームよりビールが飲みたかった。

「雨に濡れなかったお礼。おごるよ」

まいったなあ。こんな若い子に奢ってもらったことはない。少し照れた。

ビルの中は夕立の一時避難場所のようで、人で溢れかえっていた。

エレベータで8階に上ると、やはり想像したような店構えのアイスクリーム店があった。どんなにトッピングやらデコレーションで飾り付けられていても、僕にとっては甘いアイスクリームだった。

「なんだか、嫌そうね、おじさん」彼女が言った。

よく、人のことを観察する子だ。

「あ、ちょっとね。気恥ずかしい。それに甘いものは」

僕は顔の前で手をひらひらさせた。あの若い女の子の中に入っていく勇気はない。ましてや自分の娘でもないのに同伴なんて。怖気づいた僕を見て笑う彼女は「怖いんでしょ」とまた、見透かした大人びた言葉を言う。

「その通り、ちょっと遠慮するよ。君は食べたいんだろ。僕はここで失礼するよ」

「えっ せっかく来たのに・・・」

「いいんだ。楽しかったよ。あのアクセサリー、ママに渡しといてくれよな」

僕は似合わない場所を早く立ち去りたかった。

「うん、わかった。またね～」

なんとも軽い別れだ。カジュアルな生活は、言葉さえカジュアルに変化させてしまってる。僕はひと時の、遊びっばい時間を終えた。

そして、自分のオフィスに戻ると夜遅くまで仕事をしてしまった。はぁ～、まったく。世の中、何でこんなに仕事があるんだ。オフィスのエレベータを降りる時、昼間の女の子を思い出した。

「ちゃんと、あの子ママにあげたかな、俺のストラップ」

そう考えながら、携帯をポケットから取り出し、新しくついた白い貝殻と赤いガラス玉のストラップを見やった。似合わないけど夏らしくていいや・・・僕は携帯をまた直し込んだ。

次の日の夕方も雨が降り出した。ここの所、この時間になると決まって夕立が来る。街が冷やされるのでちょうどいいが。歩道の木々もうれしいだろう。仕事を早めに終えた僕は帰宅の途中だった。

夕立の避難場所は、すぐ近くにあったバーにした。1時間もすれば雨はやむだろう。長いカウンターの向こうのガラス窓からは、雨に濡れた町の風景があった。積乱雲の真下なのだろう、辺り一面暗くなっていた。

夕刻のバーは空いている。トワイライトタイムというのはいい雰囲気僕は好きだ。まだ明るいうちに強い酒を飲む。

ウォッカマティーニなどの透明な液体を良く選ぶ。酒の向こうに景色が見えるからだ。

外は大粒の強い雨だ。今日は雨が話し相手だ・・・

ひとつ席を離れた場所に濡れたご婦人がやってきた。髪が雨で濡れている。彼女も一時避難場所としてここを選んだのか・・・。大きな手提げバッグの中からハンカチを取り出し、濡れた所を拭きだした。バーテンダーがお絞りを渡そうとするのを断って、彼女はキールを注文した。そ

して、ため息。あきらめたようにカウンターの椅子に深々と腰を落ち着けた。

年齢は僕と同じ頃だろうか。主婦には見えない。芸術家タイプか。

細長いタバコを取り出すと、火をつけ、ため息とともに吐き出した。白紫の煙が流れてきた。

「あっ ごめんなさい。ここは禁煙だったかしら」

彼女は流れる煙の向こう先にいる僕を見つけて、気を使った。

「いえ、大丈夫みたいですよ」僕は目の前にあった灰皿を彼女に渡した。

「凄い雨ですね」彼女が言う。

「そうですね。みんなずぶ濡れだ」彼女の言葉に、何気なく返答した。

携帯電話の呼び出し音楽が鳴る。ラテンポップか。聞いたことはないがリズムのある音楽が流れてきた。僕のじゃない。彼女のだ。彼女は大きなバッグから携帯を取り出すと、話し始めた。

「あっ・・・」昨日のストラップだ。僕の片割れだ。僕は驚いた。

そして、こんな偶然を待っていたのかもしれない。おかしくて笑ってしまった。

横で笑う中年の男を見て、電話を切った彼女は不思議な顔をして笑顔に向けた。

「どうかされたんですか？」

「いえ、こんな偶然もあるんだなと思って・・・」

僕はポケットから自分の携帯を取り出した。そこには彼女と同じストラップが。

もともと彼女が手作りで作ったピアスなのだが、昨日、彼女の娘に手直ししてもらったやつだ。白い貝殻に赤いガラス玉が光っている。彼女はそれを見て、驚き、そして笑い出した。二人でひとしきり笑った。

「あなたが寂しいおじさんね・・・」あの子の言葉だろう

「いえ、寂しくはないんですが・・・ちょっと・・・」

またおかしくなってしまった。

彼女は昨日のことを話した。娘から「貰え」ってうるさかった事を。あいつめ・・・ちゃんと言う事聞いてくれたんだ。

僕も昨日のことを話した。アイスクリームより、ホントはビールの方がよかったんだと。彼女は微笑みながら、自分の娘の話を聞くと、

「じゃ、私がビールをおごるわ」と言った。

「いえいえ、とんでもない・・・」

彼女はバーテンダーを呼ぶと、ビールを注文した。

バーテンダーは「生ビールでよろしいですか」と彼女に聞いた。

「いえ、瓶ビールをお願いします。グラスは二つね」ときっぱり、僕の好みも聞かず注文した。どうして、瓶ビールにこだわるの？と聞いてみたかった。そう思うと同時に

「どうして瓶ビールなの・・・と思ったでしょ？」

彼女もまた、昨日の娘に似て、よく観察する人だ。

「ええ」

「私はいつかいい男と出会えたら、ひとつのビールを二人で分け合い飲みたかったの」
何か言い具合に話が進んでいる。

「ひとつのものを共有するって、素敵じゃない・・・これも」
そう言ってストラップを顔の方に近づけて揺らした。
カラカラと貝殻と赤いガラス玉が揺れて音を出した。
僕達はビールとストラップを共有しあった。
ガラスの向こうの夕立もいい具合に止んでいた。

(完)

1977年のカーラジオ

「1977年のカーラジオ」

まだ二十歳前の僕はカーラジオから流れてくる洋楽を一人で聞いていた。古いポンコツの水色ワーゲンのビートルはエアコンもなく、夏の湿った風をハンドル脇の三角窓から取り入れ、なんとか暑さを和らげるのが精一杯だった。相変わらずマフラーからは凄い音がして居る。

屋根には6フィートのサーフボードを自転車のチューブでキャリアに止めていた。お金なんかポケットには小銭しかなかった。それも、今朝、彼女に小遣いでもらったやつだ。まったくひもなのだ。ガソリンゲージはまだ4分の1程残っている。これなら今日はひとつ向こうのサーフポイントまで行けるはずだ。

健太。僕の名前だ。彼女には「健ちゃん」と呼ばれていた。大学は最近トンと行ってない。バイトで稼いだお金は2ヶ月前に消えていた。仕送りなんて親と喧嘩した時から入って来てない。もう、それはいつ頃だ・・・僕はクラスの中で一番おっぱいが大きな女の子に声をかけて、同棲し始めた。彼女のワンルームマンションはフローリングで僕にとっては豪華で、いつも砂だらけで上がりこんでは叱られた。その彼女が毎朝してくれることは裸で眠っている僕の枕元に五百円玉を置いていくことだった。そのお小遣いが溜まるとポンコツワーゲンにガソリンを入れ、カーラジオを聞きながら海まで走った。そして波乗り。

将来のことは何も考えず、白い波だけを追いながら生活していた。

彼女は陶芸を専攻していた。山口ちえ。皆「ちい」と呼んでいた。割りと裕福な家庭環境の彼女は同棲を除いては、おりこうさんの女子大生だった。周りからは「あんな男のどこがいいの」と散々言われてたらしい。

男と女は見えないところで惹かれあうという常識を、まだ若い大学生がわかるはずもなかった。

僕は彼女の何がいいかと言え、彼女自身が好きだった。飾らない、素直、そして、おっぱいが大きくて僕を好きでいてくれること・・・。

彼女が僕を好きなところ・・・聞いたことがある。

「みんないろいろ言ってるみたいだけど、なんでおまえ、俺の事好きなんだ？」彼女は口を尖らせながら

「男っぽいから・・・馬鹿だけど」と言った。

「はあ～？ そんなに男らしくないし、何にもしてあげてないぞ。

馬鹿は当てるけど。」

「私、ほかの男って知らないもん。健ちゃんが私の男だから、男らしいと思ってる」そんな言葉を聞いて、ますます僕はちいの部屋に居座るのだった。

1977年はプレスリーが死んだ年だ。ロックンロールが好きだった僕は一応、尊敬していた。だけど、この頃のプレスリーは太ったおじさんになっていた。カセットテープにはイーグルスがたくさん入っていた。

76年にヒットした「ホテルカリフォルニア」以来、ずっと聞きっぱなしだった。

ドライブ中、ちいは暑いビートルの中でうちわで涼をとっていた。

「その、うちわでリズム取るのやめろよ。盆踊りじゃないんだからさ」

「いいじゃん。涼くなるし一石二鳥だよ」そう言いながら、汗でモヤモヤしてる僕の長髪をバサバサ叩くのだった。

ちいは暇を見つけては海までついて来た。大学の授業は6時くらいまであるのだけれど、創作意欲が湧かない時はさっさとサボって、一緒に海まで行った。陽が沈む浜辺で、僕が海の中で波乗りしているのを一人ずっと見ていた。西日が顔に射し、色白だったちいはいつのまにか小麦色の健康そうな女の子に変わった。僕の髪の毛も潮風と海水で色は落ちていた。

二人とも小綺麗とは言えなかったが、汚いとも思わなかった。

僕が全然ちいにかまわず波に乗っている間は、彼女は砂を相手に一人待っていた。海から上がりちいの座ってた場所に行くと、砂で固めたオブジェがいくつも出来上がっていた。そして、「これは50点、これは70点」と点数をつけて最後に形を崩した。

せっかく作ったものだから、もったいない気がするが彼女はそうすることで「今」というのを大事にしていた。

「今、この思いつくことが私の証。創作は今を形にすること」彼女なりの創作感なのだろうか、最後に壊される砂のオブジェは彼女の表現方法の練習のようだった。

春から夏にかけてはいいが、秋がいよいよ本格的になると海辺は冷たい風が吹き荒れた。ウエットスーツなんか買えない僕は次第に、海から遠ざかっていった。波乗りが出来なく、する事がないので授業にも出てみたがまったくついていけなかった。だから、ちいの部屋でごろごろするか、時々おもしろそうなバイトを見つけては街まで出かけていった。

寒くなるにつれ僕とちいは体をくっつけあった。どこに行くのも腕を組んで歩いた。

「騙されてる女」とちいのことを悪く言う奴がいた。きっと仲がいいものだからひがんでいたに違いない。僕は騙してるつもりはなかったし、彼女も騙されてるとは思ってなかったはずだ。だけど、授業にも出てこない、外れ者の僕にくっついていること自体が、皆からは好奇の目だったかもしれない。ちいはかまうことなく、僕のそばにくっついていた。

僕はちいが素直に好きだった。

バイトの帰り、ビートルのカーラジオからビリージョエルの「素顔のままで」が流れてきた。ニューヨークの香りがする都会的なラブソングだった。

“Just the Way You Are”

君にはいつだって

いままで通り そのままの君でいてほしい
僕が君を信じるように 僕を信じてほしい
愛してる ずっと・・・心から誓う
これ以上深くは愛せないくらいに
そのままの君を愛してる

凄く感動した。僕はちいに聞かせたいと思った。

「ねえ、『素顔のままで』という歌知ってる？」

「知らない」

「すごくいいんだ。録音して聞かせてあげるね」

僕はその日、カセットテープデッキを持ち出し、ラジオから流れてくるのを待った。ちいが先に寝るねと言った後にも、ずっとその曲が流れてくるのを待った。秋の少し冷たくなった空気が僕達ベッドのまわりを囲み、二人包まった毛布が温かくて気持ちよかった。寒い地球上でも僕達二人さえいれば、温かく生きていけると思った。ちいの温もりになんかとしながら、あの曲を待った。そして、ようやく予想通りラジオから流れてきた。カセットの録音ボタンを押す。

Don't go changing, to try and please me

You never let me down before

Don't imagine you're too familiar

And I don't see you anymore

I wouldn't leave you in times of trouble

We never could have come this far

I took the good times, I'll take the bad times

I'll take you just the way you are

ちいの寝息を聞きながら、録音した安心感で僕も寝入ってしまった。

次の朝が楽しみだった。

朝起きると、隣に誰かがいるという事はものすごく幸せなことだ。

特に寒くなる秋の頃は、人肌恋しくなる。

僕はちいより朝起きるのが早いので、大きな胸を揉んで起こすはずらが日課だった。

「やん、だめだよ・・・」寝ぼけた声でちいが言う。

笑いながら、また僕は胸を揉む。何回か繰り返すとちいは目を覚ました。

「昨日言ってたやつ、あの歌録音したよ」返事も待たずプレイボタンを押す。

朝からにはちょっとけだるいが甘いメロディが流れてきた。

二人毛布の中で横になり目をあけて窓の外を見ながら聞く。

ちいの背中を包み込むように、二人丸くなって静かに聞いた。

いつまでも 素顔の君で・・・

いつまでも 君は君らしく・・・

全然、ちゃんとした男じゃないけど、男らしい男でもないけど

今はちいといたいんだ。

だから・・・君は今の君のままでいてくれないか・・・ずっと、ずっと。

それから、僕はカーラジオから何回もこの曲が流れてくる度、彼女を思い出した。
彼女とは小さな誤解から別れる羽目になった。ポンコツになったビートルは動かなくなり、廃車にした。

そして、僕は大学を辞め働きだした。

そして、ちいとは違う女性と結婚して、離婚した。

人混みの中、電車に乗り、普通に働いて普通の男になった僕は、あれほどネクタイ族を馬鹿にしていたのに、今は毎日ネクタイをしている。街路樹の木陰で足を休め、雑踏の中でビルに囲まれた狭い空を見る。

青の色は海の色だったはず・・・あの頃は。コンクリートの街の砂粒は海辺の砂浜だったはず・・・

30年の月日が僕の居場所を変えた。海の潮騒の変わりに今は都会の喧騒だ。

チラシ配りの声が、やけに嫌に感じる。

みんな捨ててるじゃないか、そんなチラシ。やめろよ。

誰かが捨てたチラシが風に吹かれて足元に転がってきた。

「海のオブジェ創作展—山口ちえ」

僕はそのチラシを拾い上げると、急いで会場に向かった。

波乗りの間、一人で待っていたちいの姿を思い出した。

僕の足元の歩道が砂浜に変わった・・・

(完)

「裸電球」

ドタドタドタッ、アパートの階段を騒がしく登ってくる音が聞こえる。

「里恵いるか？お～い、さとえ～・・・」ドアも開けないうちから大声で呼ぶのは秀治だった。鍵なんかかけてないことなんか知っているから、ノックもせずに薄い木製の板ドアのノブを回していきなり開けてきた。

「なんだいるじゃないか」

「いるのを知ってて上がってきたくせになによ」里恵は、夕飯の準備をしていた。

「おっ、いい匂い。なんだ今日は？俺にも食わせてくれよ」

秀治は狭い玄関に荒っぽく靴を脱ぎ捨てると、玄関の横の小さいキッチンで夕飯の準備をしている里江のお尻を触ってきた。

「キャッ、も～～。いきなり来て人のお尻触って。だいたい秀ちゃん、何よ『ちょっと出かけてくる』と言ったきり、何日も帰ってこないで」里恵は触られて悪い気はしないのだが、秀治のいつもの放浪癖にあきれていた。そして少々怒っていた。

秀治は4日前、一生懸命スポーツ新聞の競馬欄を見ていた。普段は競馬なんかしないのに、あまりにも熱心に見ているので里恵は聞いてみた。

「どうしたの、競馬なんかしたっけ？」

「いや、今度のお客さんが競馬に誘うもんだから勉強しとこうと思って」

「そのお客さんって女の人？」

「いや、まあ～、そんなもんだ・・・」

秀治は小さなバーのマスターをしている。夜の9時にオープンして朝の5時に終わるという生活を何年も続けていた。小奇麗なさっぱりとした男じゃないが、相談事や聞き役が得意で常連客には人気があった。深夜族の眠れない変人達を相手にしてるわけだから、いつも、おかしいことに手を染めては小さな火傷をして帰って来るのであった。

里恵と秀治の付き合いは3年になる。しかし、同棲というわけでもなく秀治は秀治で自分の家を持っていた。里恵んちの近所で似たような昭和の安作りのアパートだった。

里恵と会いたくない時は自分のねぐらに帰るし、何か妙な怪しい事をしている時も、自分のアパートで寝泊りして何日も里恵のアパートに来ない日もあった。

里恵も四六時中、秀治がいないので夫婦みたいなのか恋人なのか、遊び相手なのか、まあ、はっきりどんな相手なんだという形に収めなくていいので、こんな生活スタイルが嫌いではなかった。

四十歳近くになると、ちゃんとした結婚をした連中が「うちの旦那は・・・」と悪口ばかり言う結婚生活を厭というほど聞かされているので、形にはとらわれなくなかった。しかし、それでも田舎の両親はあきらめきれず今でも「結婚しろ」と言ってくるので、最近は田舎の実家に帰るのが億劫だというのが里恵の本音だった。

「何日か来ないと思っていたら、どこ行ってたの？お店も休んでいたでしょ？」

「あ～、すまん。実は競馬場巡りをしていた」

「その女の人と？」

「あ～、すまん。別に気に入ってるわけじゃないから・・・」

「別に謝らなくていいよ。私たち結婚してないし恋人でもないから・・・」

「ほんとにその人は好きなわけじゃないから・・・」

「いいよ、言い訳しなくても。どうせまたふられたんでしょ」

里恵は不思議なほど嫉妬しなかった。今までの秀治の女性遍歴がそうさせるのか、秀治のあっけらかんとした所が彼の個性なんだと思うと別に他の女と遊ぶことが気にならなかった。自分の母親が、秀治と同じような遊び癖の父を好きでいられるのは、やはり親子なのかなと思い血は争えないものだと思えていた。

「それで競馬は勝ったの？」

「それがな～、初日に万馬券当てて五〇万円の儲けよ。ビギナーズラックという奴か、あれ」

「ふ～ん、それで」里恵はなんだかむかついた。

「で、その五〇万円で競馬場巡りしようと言ったわけよ」

秀治には里恵の気持ちの変化なんかわかるわけなかった。そういう繊細な気持ちがあれば他の女と旅行に行くことはありえない。それにまた戻ってくるのだから、どこか頭のねじが外れていると言われてもおかしくなかった。

秀治は4日間の競馬の話面白おかしく里恵に聞かせた。

「それで五〇万はどうなったの？」

「なくなった。右肩下がりでなくなった。ビギナーズラックは一回だけなんだな」

秀治は残念そうに言う。彼女の話をするわけでもなく競馬の話だけを上手にする。

里恵も彼女のことは聞きたいようであり聞きたくないようであり、秀治の笑い顔を見ていると

「帰ってきたんだからいいか・・・」と、へんなところに落ち着くのであった。

「飯、飯くれよ～」秀治は子供のように里恵に言う。

里恵も我が子のように、ふらっと出て行った男にしつこく言わないで夕飯をよそおった。波風立たないのが秀治には居心地がいいのだろう。西日が差し込む古いアパートの狭いキッチンで、里恵の作った夕飯をがつがつ食べる秀治の顔を見る里恵は母親の顔だった。

数日後、秀治は相変わらずお店では大きな声で騒いでいた。明るく務めると言うより、秀治の性格だった。

秀治の店はカウンター席が8席と十人くらいが座れそうなボックスがひとつのこじんまりとした店だ。

音楽は昭和の洋楽に、時おり女性シンガーのブルースがお決まりだった。

常連客は怪しい仕事の連中が多かった。だいたい深夜の5時まで遊ぶ奴らなんて普通の人たちじゃないことは確かであるが。

涼しさが残る夜に、綺麗な美人のお客が現れた。秀治の好みの豊満な体をしていた。

「初めてですよ」秀治の声に緊張感が。

「はい、ほらこんな時間に開いてるお店ってあんまりないでしょ、こちら辺じゃ」

「あ～、だから来られたんですね。深夜はお好きですか？」

「いつも眠れなくてね・・・」

「美人が眠れないのは歓迎です。またチョイチョイいらしてくださいよ」

「え～え、私好みのマスターだからひいきにしちゃおうかな」

秀治はいつもより舞い上がってしまった。もう3年もお店をやっているが、彼女は飛び切りの美人だった。

里恵とはぜんぜん違う。秀治の頭の中での理想の彼女に近かった。

秀治とは十歳の歳の差があった。名前は景子という。

秀治は得意のカクテルでもてなした。趣味や何が好きか、何をしてるのかをしつこくなく上手に聞く。

「ねえ～マスターは彼女はいるの？」

秀治は一瞬、里恵の顔が浮かんだが「いないよ」と答えた。

「だったら、今度デートしない？」

「うれしいな。昼間だったらというか、いつでもいいよ。お店休むから」

「え～そんなことしていいの？」

「美人の君のためじゃないか、なんだってするさ」秀治は本気で思っていた。

「一度競馬場に行ってみたかったの」

秀治は笑った。この前の女といい今度の女といい馬のどこがいいのか・・・

「なにかおかしい？」

「いや、なんで・・・馬なの？」

「なんか颯爽と駆け抜けるところなんかかっこいいじゃない。それにギャンブルもしてみたいし」

「あんまりお馬さんは詳しくはないけど、ビギナーズラックはあるかもね」

「それいいかも・・・マスター、お馬さんは？」

「この間続けてはまってしまった。ビギナーズラックで五〇万円当たった」

「すご～い」

「でも、それっきり。最後はすっからかん」

「ふふ、そうかもねギャンブルなんて」

秀治は馬なんてどうでもよかったが、彼女とのデートにはすこぶる興味があった。

次の週の平日、曇り空の競馬場に景子と出向く秀治の姿があった。

「ねえ、サラブレッドのお尻ってきゅっと締まって、かっこいいわね」

彼女は出走場が顔見世するパドックで柵にもたれながら秀治に声をかけてきた。

「どうかな、君のお尻のほうがかっこいいと思う」

「ちゃんとお馬さん見てよ。私のお尻はどうでもいいから」

「馬券買うのか？」

「うん。どの馬が一番速いと思う？」

「ビギナーズラックは何にも知らないから当るんだ。自分で決めてみろよ」

「そう、じゃあの馬」景子は栗毛色で毛並みが光っている馬を指差した。

「2番目は？」秀治は面倒臭そうに言う。

「あれ」今度はまだらの決して綺麗に見えない馬を指差した。

「なんで？」秀治はいぶかしげに聞いた。とても勝てるような馬には見えなかった。

「感よ。ビギナーの感」そう言うと景子は笑った。

どうせ遊びなんだし、ギャンブルの金はなくなる。秀治は景子が指差した馬の馬券を買いに行った。

レースはあっさり負けた。

2回目も3回目も、かすりもせず的中しなかった。

景子は「なんで？ビギナーズラックがあるんじゃないの」と言って、性懲りもなく、また馬券を買いに走った。

秀治は景子の熱くなる姿を見て

「そう、当たるもんじゃないよ。そろそろ出ようか」と景子とどこかに行きたくて、競馬を切り上げるように催促した。

結局、景子は2万円近くもすってしまった。

機嫌の悪い景子を助手席に乗せるとレストランで機嫌でも直してもらおうと、わりと高級なお店に向かった。

とてもこんな雰囲気じゃホテルまでたどり着けない。

景子はレストランでも不機嫌なままだった。お金のない秀治には奮発した店だったのに、ちっとも話に乗って来ない景子を見て秀治は早々とデートを切り上げることにした。

美人で理想に近い女だが、どうもリズムが合わない。客とマスターの関係ならスムーズに話も進むが、昼間のデートでは何か勝手が違うと言うか、相手の機嫌もあるのかもしれない。景子が秀治を別に求めてないことが手に取るようにわかるのだ。気を使う。疲れてしまう。

秀治はどんな美人でも心が通わないと楽しくないもんだと少し自覚した。

本当はわかっていたのかもしれない。顔の理想がすべての願いを叶えてくれるわけがない事を。

気を使うのも嫌だから、秀治は帰りの車の中ではハンドルを握りながら無口でいた。

別にもう話すことはない。景子も何も話すことなく車内は気のない音楽だけが流れていた。

自分の街に帰ってきた秀治の車が交差点で止まると、向こうのスーパーの駐車場に里恵を見かけた。

「ねえ、ここで降りてもらってもいい？」秀治は景子に言った。

「えっ、ここで？」いぶかしそうな顔をした景子は秀治の方を見ると、何も言わず車から降りた

。

信号の点滅で横断歩道を渡る景子を見て秀治は「もう会うこともないな」と思った。

目の前の信号が青になると、里恵のいるスーパーの駐車場に入って行った。

「おーい里恵、なにやってんだ？」

「あら、秀ちゃんいいところ来た。このキャリーが壊れて困ってたんだ」

里恵は安物の金属の荷物運びのキャリーの車輪がガタガタになっている所をいじっていた。

「はあ～、里恵、おまえこんなの使ってるのか。まるでおばちゃんみたいじゃないか」

「おばちゃんて悪かったわね。スーパーの荷物って重いんだよ」

秀治は車から降りると、里恵のおばちゃんキャリーを見て「ダメだ、コリヤ」と言って荷物ごと抱えて車の後部座席に入れ込んだ。里恵は助手席に乗り込んできた途端、

「あっ、いい匂いがする。女の匂いだ。誰か乗せてたの？」と聞いてきた。

まったく鼻がいいというか、勘の鋭い女だ。しかし、怒りはしないことを秀治は知っていた。

「ああ、ちょっとな。お客さんを乗せてた」

「ふ～～ん」しばらく里恵は黙っていた。なにかまずかったかな・・・

「ねえ、秀ちゃん。今夜はおいしいよ。すき焼きしよ」里恵の顔はもう微笑んでいた。

まったくこの女は俺の心にすぐ入ってきやがると秀治はハンドルを切りながら、ちょっと安心した気持ちになった。

「さとえ・・・」秀治は声に出して呼んでみた。

「ん？」

「・・・いや、ただ呼んでみただけだ」

「どしたの秀ちゃん。また、ふられたの？」

「あのな～、おまえ・・・まあ・・・いいか・・・」

車は安アパートの駐車場に止まった。里恵のアパートだった。

鉄錆びた階段を里恵のおばちゃんキャリーとスーパーの袋を抱えて秀治は上った。

もうずいぶんあたりは暗くなっていた。

里恵は古い木製の板ドアを開けると、狭い玄関に靴を脱ぎキッチンの電球を点けた。

秀治は里恵の後に続き、同じように狭い玄関に靴を脱いで里江の部屋に上がりこんだ。

なんの飾りもない古いキッチン。テーブルの上に荷物を置いた。裸電球が温かい灯りをかもし出していた。

「なあ、里恵、そろそろこの電球替えないか？」

「エッ、切れそう？」

「そうじゃなくて、裸電球なんて今時ないぞ」

「いいじゃない、点くんだから。嫌いなの？」

「いや、嫌いじゃないけど、なんか寂しくないか」

「うん、一人だったら寂しいよ・・・。秀ちゃんが来てくれたら寂しくないけど」

秀治は小さく笑った。これなんだよな・・・

秀治は裸電球を揺らしてみた。部屋中の灯りが揺れ里恵がそれを見て笑った。

「ねえ、秀ちゃん。食べていくでしょ？」

「ああ・・・」

「泊まってく？」

「ああ・・・」

里恵の尻がかわいく揺れた。サラブレッドの尻よりいいなと秀治は思った。

(完)

「つがい」

八年前にさかのぼる

「同窓会の幹事してくれないかなあ〜」

龍一が、アイスコーヒーのストローをぐるぐる回して聞いてきた。

「えっ、私が？」

「そう、美香とやれたらいいなあ〜と思って・・・」

二十七年ぶりの高校の同窓会をやろうと龍一が言い始めた時は、ただの参加者だと思っていたのに龍一は私に協力を求めてきた。龍一は高校時代、我がクラスの級長をしていた。よくあの頃からみんなをまとめていた。

だけど何か行事があるたびに私を呼び出し、いつも彼の秘書のようなお手伝いをさせられていた。

久しぶりに会ったのに、やっぱりまたお手伝いを求められたのであった。

お互い四十五歳になり、同じ町に住み、それぞれ普通に結婚して普通に子供を持ちここまできた。

ただ私は残念ながら今年の初めに離婚した。どこからか聞きつけて彼は私の目の前にここ最近現れるようになった。私が独り者になったのを狙ったかのように。

少なくとも私は龍一の事を嫌いではなかった。いや、好きだったのかもしれない。

高校三年生の時「男女の間でも友情は成立するよね。だからこのままずっと友達でいよう」と彼は告白のつもりで言ったのだろうけど、私はただの友達になりたくなくて断った。あの時、ストレートに付き合ってくれなんて言われてたら多分、私は龍一と結婚してたのかもしれない。

今なら気づくことも、あの頃はちょっとした言葉尻に傷ついていた年頃だった。

そして、お決まりのパターンであるかのように彼との縁も薄くなり、お互い別の伴侶を選んだわけだ。

「また、あなたのお手伝い？」私は悪い気はしなかった。

「ごめん。他に頼める奴いないんだ」龍一は薄くなった頭髪を掻きながら、頼み込んできた。

「わかった。いいわよ。でも面倒だな」

「このリストに電話してくれるだけでいいからさ。ほら、中年の男性よりやっぱり美しい女性のほうが男子は喜ぶだろ？」一枚の紙切れを貰うと二十人ほどのリストが綺麗にまとめられていた。

「じゃ、龍一は女子の方に電話するのね」

「ああ、たくさん集まればいいね。他の手配は恭一や研二らとするから」

彼は男友達の名前を告げると、同窓会の予定を話し出した。

「二十七年ぶりか〜みんな変わってるだろうね・・・」

「ああ、恭一はもう頭は禿げてるし、研二は糖尿だ」

「え～、そんなに・・・。なんだかがっかりすることの方が多かったりして・・・」

龍一は家庭のことは言わなかった。いくら聞いても「うん」とか「ああ」とか気のない返事で、できるだけ生活感を隠そうとしていた。でも、私もそのほうがよかった。容姿はずいぶん変わったけど、昔のままの龍一がそばにいたからだ。

同級生じゃないと他人を名前と呼ぶことはほとんどない。苗字以外で呼べるのは、やっぱり昔の同級生だけだ。だから喫茶店で「龍一」「美香」と呼び合うと夫婦のように勘違いされた。

準備に半年がかかった。現住所の確認、出欠の手紙、案内状、パンフレットなど意外とやるが多かった。

その度に龍一は私の家の近くの喫茶店に来て打ち合わせをするのだった。

だんだん、何回も会うごとに私も昔の気持ちが蘇ってきた。

慕う・・・というのか、好き・・・というのか、あの頃は隆一のそばにすることが心地よかった。

龍一はどうなんだろう？

やはり、今もあの時の「男女間の友情」のままなんだろうか？

そんな筈はないと思うのだが口に出せなかった。それに、彼は妻帯者なのだ・・・。

同窓会は大賑わいだった。担任の先生はおじいちゃんになっていた。女友達も男友達もみんな、変わらない様で変わっていた。なんとなく面影はあるのだが、どうしてもギャップがおかしい。タイムマシンに乗って未来に来たようだ。そういう私も老けているのだが。

龍一は大きな声を出して、テキパキと進行を進めていた。時折、手招きで私を呼ぶと「あれを持ってきて」とか「これはどうなった？」とかまるで秘書扱いで私をこき使った。でも、みんなの笑い顔の中で大きな仕事を終えたと思ったら、最後の解散式の時、泣けてきた。なんだか、またみんな明日からいなくなるんだと思ったら、少しだけ悲しくなった。

どうも中年になると涙腺が緩み易いらしい。

二次会も三次会も最後まで龍一と一緒にだった。そして、みんなが帰り龍一と二人きりになった。

「お疲れさん。やっと終わった。美香がいてくれて助かったよ」酔った龍一が言ってくれた。

「うん、大変だったけどおもしろかった。よかったね」

「みんな老けてたなあ～。俺はどうだった、その中で？」

「な～に、カッコいいと言って欲しいの？」

「つい、比べてしまうんだよなあ～。俺はおまえよりまだまだ若いぞって・・・」

「口には出さないけど、そんな張り合いしてたんだ？」

「俺だって頭薄いのに、ナニ威張ってんだか。でも男同士はどこかで張り合って生きてるんだ」

龍一は先程までの余韻に浸るかのようにニヤニヤしていた。競争社会という現実にいる男

達はいつも張り合って生きてるんだろう。そして勝ち負けを気にして頭が薄くなる・・・。

女性同士もどこかそうかもしれない。同窓会というのは、今まで生きてきてどれだけ幸せだったかを見せびらかし合い、自分の位置を確認する、ある意味どぎつい会なのかもしれないのだ。

「ねえ～私は何番目に綺麗だった？」女性の比べる所は美しさ若さなのだ。

龍一はエツという顔をして、私の顔を覗き込んできた。そして

「う～～ん、一番と言ったら勘違いしそうだから二番と言っておこう」

「え～、二番。じゃ、一番は誰だったのよ？」

「う～～ん、一番は高校生の頃的美香だ・・・」

「なによそれ・・・喜んでいいのか悪いのか。やっぱり若い時が宝石だよね・・・」

「あのさ、あの頃に戻れたら美香は何がしたい？」龍一が聞いてきた。

「う～～ん、ビキニ着て海で泳ぎたい」

「え～～っ」笑いながら龍一は私の体形をまじまじと見る。

「俺は十七歳的美香に選択を間違えるなよと忠告しに行きたい」

「まあ、ずいぶんね・・・」

私はこういう会話をずっとしていたことを思い出した。

もしかしたら、あの時「うん」と言ってたら、ずっとこんな会話を続けられる夫婦でいられただろうか。

いや、やっぱり無理だったのではないかと思った。

こうやって時を経て、二人でいろんな経験をしたからこそ、またあの頃に戻れるんだ・・・いや戻りたいのかもしれない・・・

男と女が「つがい」でいられることは運命だけが決めるもの。また、離れ離れになることは十分ありえる。

ただ、心が通う「つがい」は私の希望だったのかもしれないなかった。

妻帯者である龍一はどういう気持ちで私と会ってるのだろうか？

やはり、ただの友達？ あの時の延長のまま？ また男と女の友情なんて言い出すの？

私は意地悪をしたくなった。

「男女の間でも友情は成立するよね。だからこのままずっと友達でいよう・・・」

昔、龍一が言った言葉そのままを返した。龍一はドキッとしたのだろうか？

下を向きながらくくっと笑い、何も言わなかった。

どう感じたのだろうか？あの時の「自分の言葉」だと気がついてるのだろうか？

ちょっとした沈黙があった。一分だろうか、二分だろうか・・・

龍一は顔を私に向けると

「いやだ・・・」と言った。そして

「男女の間では友情は成立しない。好きだからそばにいたい・・・」と言った。それから私の目を見て、

「俺は結婚しているけど、美香を好きになってしまった。不倫じゃないと思ってる。純愛なんだ」

龍一は私の肩を抱こうとしたが、私はまたしても彼の告白をするりとかわしてしまった。

「ダメよ、結婚してるじゃない・・・」言う筈もない言葉が口から出てきた。

それっきり、龍一は黙り私達の同窓会は終わった。

夏の夜の同窓会は一夜の夢と化した。

同窓会から、しばらくして、龍一が久しぶりに私の目の前に現れた。

なんだかこの前より若返ってるような気がした。多分それは笑顔のせいだろう。

同窓会の夜のことは忘れて、またいつものように馬鹿話をして笑いあった。

あれから、ずっと私は後悔していた。あの時、流れに乗ってそのまま付き合っていたら「つがい」になれたかもしれないのにと。しかし、それも運命だ。今度の三回目の出会いはどうなるんだろう。

「あのさ、美香は今好きな人いる？」いきなりきわどい質問が飛んできた。

「いるよ・・・」本当はあなただと言いたかった。

「そうなんだ・・・」さっきまでの笑い顔とは別人になる龍一。がんばれ龍一・・・

「それでもいいからさ、また友達になってくれないかな？」

「いやだよ・・・。友達より恋人がいい」言ってしまった。

急に笑顔になる龍一。そしてテーブルの上に置いていた私の手を取ると、口元に引き寄せキスをした。

龍一から私への初めてのキスは指先だった。

「やっとわかった。高校生の時ちゃんと俺と付き合ってくれと言えよよかったんだ。かっこつけて友達でいようと言ったから遠回りしてたんだ。やっと大人になってわかった。ずっと俺、美香のことが好きだったんだ・・・」

龍一はそう言うとは何回も私の指先にキスをした。

「私だってそうだよ・・・知らなかったんだ・・・ほんとの気持ちが・・・」言えなかった。

それから私達は現在まで付き合っている。恋人同士だ。

「不倫じゃない、これは純愛なんだ」と彼は言っている。

どこかのタレントが言った「不倫も貫けば純愛なんだ」と。

納得している。そうやって八年間が過ぎた。

今でも龍一といると幸せだ。今度の同窓会の幸せ比べでは多分私が一番だろう。

「つがい」になる運命は決まっていたのかもしれない。多分、来世も一緒になるまでいろいろいぶんあろうけど、また彼と「つがい」になる自信はある。根拠はないけど。

龍一が呼んでる声がある。また彼のお手伝いしなきゃ・・・

(完)

七つのしたいこと

「七つのしたいこと」

男と女の恋愛は、キスをしあって始まる。

「あなたのことが好き」

「おまえが好きだ」

100の恋愛言葉はどんなに感じて、気持ちよくなっても、まだ、恋愛の入り口だ。

今 メールで知り合った恋人未満の人がいる。

好きだったら、やっぱり、入り口だけじゃなく、もっと奥深く知りたくなる。 もっと感じたくなる。

「いつか君の肌に触れたい」

「私も・・・」

100回「好き」を繰り返したら「次のテーマ」が自然と出てくる。

ホントに触れ合い、そしてキスをする・・・夢が目の前に現れる。

その夢を実現したく、会いたくなる。

キスをするためだけに会いたくなる。

心には切ない想いと、触れ合う喜びと、抱きしめたい願望。

「そんな年齢じゃない・・・」と自分に恥ずかしがる。

「まだ、私だって、僕だって・・・」心の芯が熱くなる。

中年の恋愛は、なかなか踏ん切りがつかない。

「どこから飛び出せばいいのか」

「ホントに私で、僕でいいの？」

交差する想いが、キスの始まりを遅くする。

そして、なんだか、その戸惑いが毎日を彩ってることに気がつく。

そして、ふたりはキスをしたくなった。

久しぶりに・・・

久しぶりに・・・

じゃ、そろそろ恋愛の中を探検してみようか・・・。

8月29日今年の8月の最後の日曜日、僕達は約束した。

この日にキスをする約束を。

恋愛はここから本格的に始まりそうだった。

「だめだ～、メールじゃ欲求不満になりそうだ」

慎一はサイトで知り合った奈美子に、思いをぶつけた。

3ヶ月続いたメールの交換は行き着くところまで行ってしまった感じがした。

もう、何回好きだと書いたことだろう。最初の1ヶ月はただの友達だった。そして家族関係、趣味、人生の生き方、悩み・・・ありとあらゆることをいつの間にかさらけ出しあって、なんだか「好き」という感情が芽生え始めた。それからは坂道を転げ落ちるように告白もどきが続けた。それは奈美子も同じだった。ランデブーという言葉があるように、二人は振り子のように同じ方向に揺れ同じ夢を見た。イツカアイタイ・・・。奈美子はメールを打ち返した。

「そろそろいい時かもね。私もあなたに逢いたい。でも、大丈夫？」

「何が？」

「幻滅しない？」

「なにが？それは顔？体？」

「どっちも・・・心配」

「それは僕だって同じさ。正直、勇気がない。こんな歳だから」

「でも私達言ってたよね、一緒に時を積み重ねたからお互い様だって」

奈美子はパソコンのそばに置いたワイングラスが空になっているのに気がついた。冷蔵庫には冷やした白のワインが、まだ半分以上は残っていた。毎晩、慎一と20分間のメールのやり取りをする。それは二人で決めた制限時間だった。そうしないと朝までやり取りすることはしょっちゅうだったからだ。ワインを飲みながら、気が知れた慎一とメールの交換をする。それが奈美子にとっては一日の中で一番充実した時間だった。子供も大きくなり、離婚経験者の仲間入りもした。気がつけば周りには誰もいなくなり、一人の時間が増えていた。寂しくはないが、寂しくもある。何かのきっかけで寂しさが堰を切ったように溢れかえる時がある。だけど、立ち直りも早かった。これが私の選んだ人生。くよくよしてても始まらない。奈美子は開けたボトルからグラスにワインを注ぐと、パソコンのそばに持ち寄り、またメールを打ち出した。

「会って、何がしたい？」

答えはわかっているが慎一の事だからヘンなことを書いてくるかもしれない。

いつだって想像以上のことを書いてくるのだ。

慎一は奈美子のメールを見て、したいことを白い紙に書いてみた。

七つのしたい事が浮かんだ。

「今、君と会ったら、何がしたいのか七つのことが浮かんだ。とても恥ずかしくて全部は見せら

れない。よかったら君が選んでくれないか？」

「えっ どんなの？全部知りたいんだけど」

「いや、とても見せられたもんじゃない。この七つは僕のしたい事なんだけど選ぶ勇気がない。君が選んでくれたら助かる」

「なんだか責任持たなくちゃいけないみたいだから困るわ」

奈美子は慎一の七つのしたいことを想像してみた。きっとエッチなやつだわ。

慎一からメールが来た。

「いや、これは僕が決定したこと。正真正銘、僕のしたいことだから気にすることはない。どれでもしたいんだが、この際、奈美子が決めてくれ。覚悟を持って悩まずに実行できそう。自分で決める勇気がない。だって、とんでもないこと書いてるから」

「とんでもないことって？」奈美子はメールを見て笑った。

「実は口に出して言えるもんじゃないんだ」

「きっと、エッチなんですよ」

「それもある。が、恥ずかしいこともある」

「恥ずかしいことって？」

「・・・恥ずかしいから言えない」

またしても奈美子は笑ってしまった。あ～どんな7個なんだろう。

知りたい。

「選ぶのは1個だけなの？1個だけでつまんなくない？全部いっぺんに出来ないの？

こう言ったら私がして欲しいみたいでずるいなあ～」

慎一のメールはすばやく答えが返ってきた。

「1個だけにしてくれないと、もったいない。会うたびにしたい事が1個ずつできるなんて、幸せだ。7回も君と幸せになれる」

あ～ん、どんな事書いてるんだろ？知りたい。知りたい。知りたい。

奈美子はワクワクしながら想像した。ほんの入り口の部分だけ・・・

「早くしないと時間切れになるぞ」慎一から催促のメールが来た。

「わかったわ。ちゃんと書いたとおり実行して頂戴ね。

でも、私が厭だったら協力しないから・・・。じゃ、上から3番目のしたいことをリクエスト？します（笑）」

奈美子はメールを打つ指に力が入り、何回も変換を間違えた。

慎一は奈美子が指定してきた上から3番目のしたい項目を見た。

3番目の欄は見事にSEXと書いてあった。それも、服を脱がずに。

え～っ、いきなりこれはまずいでしょ・・・いくらなんでも・・・
慎一のイメージはこうだった。

「狂おしいほどの二人のたかまり。待てないほど求めている。
キスもそこそこに情欲に駆られて思いをぶつけ合う・・・
服を脱ぐのも、もどかしい。今夜二人は結ばれる」

さて、どうするか？

これじゃ、すぐ協力してくれないな・・・待てよ。あるかも？
ない、ない・・・慎一は自分の想像に笑った。

「どうだったの？」今度は奈美子から催促のメールが来た。
正直に言うわけには行かないだろう・・・慎一は手順どおりの一番上の
無難なやつを書くことに決めた。

「いいのを当ててくれた。これだったらできるかもしれない。
だけど君の協力が必要なんだ。当てた責任で協力してくれないか」

「内容によるわ・・・どんな事書いてたの？」

「熱いキスがしたい・・・これが3番目だった」嘘だった。
当たったのは服も脱がずにSEXすることだったのに・・・打算的になってしまった。
慎一は、この辺なら協力してくれるだろうと踏んでいた。

奈美子は意外と普通の答えで、どこかがっかりしていた。何を求めてたんだろ。
きっと抱かれることを想像していたことは間違いないと自分を自覚して少し恥ずかしくなった。
これくらいでよかったのかも・・・でも・・・
出会っていきなりキスをするのも大変だ。それも「熱いキス」と書いてある。
奈美子は考えながらメールを打った。

「ほんとに、それなの？あなたがしたいからそう決めたんじゃない？」

「そうだよ。したい事を並べたって最初に言ったろ。まずかった？」

「いきなり出会ってキスはちょっと・・・勇気がいるわ」

「そう、僕も勇気がいる。だから君に選んでもらった」

「ずるいわ。なんだかあなたの後押しをしてるみたいで複雑・・・」

慎一はキスでこんな回答だから、「服も脱がずにSEX」なんか返答していたらあきらかに失敗してたと思った。

よし、まずはキスから始めよう。

「3番目を当ててくれてありがとう。熱いキスのやり方は知ってます？」

奈美子は慎一のメールを見て、ずいぶんご無沙汰のキスを思い出そうとしたが
熱いキスなんて思い浮かばなかった。前の旦那としたのは思い出したくもない。

ずっと昔・・確か二十歳の頃だったろうか。

若い時のキスが熱いキスだったのかどうか覚えてないけど、ときめいていたのは思い出せる。
好きだった彼とのキスは今思い出しても胸の奥がずんと響く。

あれが「熱いキス」かな。

え～ そんなキスを今からも一度するの？できるかしら？

「熱いキスのやり方はとうに忘れたみたいです。ほんとにするんですか？」

「そう、君が決めてくれたから」

「なんだか、ずるいわ」

慎一はホントはもっとずるい事したんだと言いたかった。

「もともと、君が会ったら何をしたいと聞いたから答えたんだ。ずるくはないよ」

「いいえ、なんだかずるい」

「そうか、キスは嫌いなんだ」

「嫌いじゃないけど、勇気がない」

「だから君が決めたんだ。上から3番目と」

「やっぱり、ずるい」

もう、こうなったら笑ってその気になるしかない。

奈美子はそれもまたいいかもと考えた。熱いキスを期待してみよう。

「いつ、熱いキスをしようか？8月最後の日曜日は空いてる？」慎一。

「え～、大丈夫です。ただ、初めて会ってキスが出来るかどうかはわかりません」

「それでいいよ。僕の願望のひとつだから気にしてくれてたら嬉しいです。

それじゃ、待ち合わせの場所と時間はちょっと調べてから折り返しメールします」

僕は奈美子と熱いキスをしたら、きつとこの先、もっと好きになってしまうだろうと思った。

ただ、この狂おしい程の会いたさは、まだ恋の始まりだと知っていた。

そしてこれからキスをして、もっと恋にのめりこむ。奈美子とメールで交わした3ヶ月は本当に楽しかった。

毎日が昔のように色鮮やかに蘇り、女性という存在をまた大事にしたいと思った。

男が女を好きになる時は抱きしめたいと思うかどうかがひとつの基準となる。

抱きしめて、温度を感じ、匂いを感じ、もっと、もっと抱きしめたくなる。

そして、熱いキスを交わし秘密の出来事を共有する。

二人の秘密があるからこそ、信頼し、また好きになる。

かわいい男の言い草かもしれないが、女がいるから男は優しくなれる。

いつまでも好きな君をずっと胸の中に抱いていたい。

守りたいと思える女に出会えたら男は幸せだ。

そして冒頭のとおり

8月29日今年の8月の最後の日曜日

僕達は約束した。

この日にキスをする約束を。

恋愛はここから本格的に始まりそうだった。

ちょっとずるをしてしまったけど、これくらいのずるがなけりゃ恋は進まない。

3番目に書いた「会ったらしたいこと」

これは、彼女と熱いキスが出来たら、チャレンジしてみよう。

もっと、仲良くなったら今度は彼女に「したいこと」を書かせてみよう。

その時にはずるをさせないつもりだ。

中年の熱いキスは嫌いですか？

(完)

ギャンブラー物語

「ギャンブラー物語」

時計は午前3時を過ぎていた。

分厚い木製のカウンターに並べられたトランプ。

男が三人、女が二人ポーカーをしている。

ここはビルの3階、バーという看板は出しているがさっぱり人気がないバーだ。

店内はカウンターの他には暗い照明と、少し傾いたビリヤードの台。

調整すればいいものの癖のあるビリヤード台はマスターの稼ぎ頭だった。

腕に覚えがあるハスラー気取りのお兄ちゃんを引きずりこんでは

傾いた癖を知り尽くしたマスターのいくらかのこずかい稼ぎに利用されてた。

「何時までやるんだい？」優作は負けが込んでる女に聞いた。

「もうちょっと・・・」

長い髪を少しウェーブさせた彼女は顔も色気も申し分ないのだが、

とかくギャンブルには目がなかった。

「マスター、いい加減やめさせねーと、このおばはんしつこいんじゃない？」

「勝ってる奴は、負けた者の言うことは聞いてあげないとかわいそうだろ？」

つきあってやれよ」

マスターはグラスを拭きながらオーティスレディングのCDのボリュームを上げた。

「ねえ～、モモちゃん・・・いい加減あきらめないと今夜だけでも3万はいってるよ・・・」

「いいの・・・うるさいわね～。ツキがない時はとことん落ち込んだ方が立ち上がり早いのよ」

モモ53歳。自営業。結婚の経験あり。現在は離婚している。

家事が苦手な旦那が嫌になった。

自由奔放にしたいことをしたい・・・が彼女が離婚で手に入れたポリシーだ。

別にギャンブルに狂ってるわけではないのだが、明日知れない身を占いでもするかのようにトランプに今後の行方を託すのが好きだった。

「私の未来はトランプに聞いて頂戴・・・」綺麗な指先がめくったカードはこの日を象徴するかなのようなワンペアにもならないハートのクイーンだった。

「オープンだ。見せろよ。終わってるだろ。またクズ手に決まってる」

「なんでわかんよ」

「顔に書いてある。ポーカーはポーカーフェイスって言葉があるだろ、知らないのか？」

「そんなに顔に出てる？」

「あ～、ダメだダメだ・・・私は運が無いって顔に出してる。終わりだ。もうやめだ」

「最低！まだ付き合ってくれてもいいじゃない」

「もう他のみんなもうんざりなんだよ、今日は。モモ、飲みに行こう。負け賃は要らない」

「負け賃ぐらい払うわよ」

「いいから、いいから。ちょっと付き合っただけで欲しいところがあるんだ」
優作とモモとは、もう2年の知り合いだった。
ここ寂れた怪しいバーでの付き合いなのだが、なんとなく気があった。
優作も50になり、昔のハードボイルドは似合わない。
首のたるみ、薄くなった頭。
まだそこらへんのサラリーマンよりでしたが、十分親父になっていた。

「マスター勘定してくれ。ここはモモのおごりだ」
「おや、どしたの？今日は早い帰りだね」
「早くね～よ。もう朝方じゃないか。マスターもこんな商売してると早死にするんじゃないか」
「馬鹿野郎、遅く寝て遅く起きるのがジャズメンなんだよ！」
「まっ、確かに。健康なジャズ好きな奴はいない・・・」
さっきまでポーカーをしていた他のメンバーは、もういなかった。
「お～いモモ。付き合ってもらおうぞ」
「どこに行くのよ？ホテルは嫌だからね」
「ば～か、おばさんの体なんていらね～よ。モモは休みは取れんのか？」
「なによ・・・明日も引きずりまわす気？」
「あ～、おまえならすぐ休みも取れるし、待ってる奴もいないだろ」
「失礼ね。その通りだけど・・・負けの代わりに何をさせる気？」
「付き合ってもらっただけだ。体はいらぬ。多分おまえは喜ぶ・・・」
「なによ、それ？」
「とにかく、ここを出よ。あいつが聞いている」
優作が向いた方向にはマスターがニヤニヤしていた。
「マスター・・・しばらく来ね～からって心配すんなよ。後で報告してやる」
優作とモモは狭いエレベーターに乗り込むと1階のボタンを押した。
9月の夜はまだ昼間の熱が残っていた。深夜タクシーは数珠繋ぎに歩道に並んでいた。
「ねえ～どこ連れてくのよ？」
「まず、飲もう」優作はモモの手を取り足早に歩いた。

狭い路地を3つほど曲がると白いビルの地下への入り口に着いた。
看板はない。地下に降りると壁に金属の文字でBLACK JACKとだけ貼り付けてあった。
ショットバーだった。店内には3人の客がいる。
優作はBOX席にモモを座らせるとジンライムを注文した。
モモはディタスプモーニ。
ライチリキュールにグレープフルーツを絞り込みトニックソーダで割った女性に人気のカクテルだ。
「どこに連れて行く気？おもしろいところ？」モモが聞く。

「パスポートはあるか？」優作が聞く。

「家にはあるわよ。海外？　へ～面白そうじゃん。どこ？」

「ラスベガス・・・」

「えっ～～～うっそ～」

「うれしいだろ・・・。付き合ってくれ・・・」

「行く、行く・・・もちろんタダだよな」

「あ～」

「やった～・・・ギャンブル？」

「それもあるが、娘の結婚式だ」優作は照れくさそうに言う。

優作には25歳の娘がいた。

海外留学のまま住みついて向こうで男が出来たらしい。

ベガスでレストランをやっている男だそうで、そこそこの金持ちだそうだ。

航空券代も出してくれるそうだ。

「どうせタダだから彼女も連れて来ていいよ」と言いやがった。

優作は娘の話になると照れる。

「で、何であたしなのよ？」

「ギャンブル好きだろ？」

「好きよ。それだけであたしなの？」

「ああ・・・おかしいか？」

「・・・嫌、別に・・・あんたの彼女になるの？」

「形だけさ。目的はギャンブルだから」

「ふ～ん、まあいいか。それで、いつ行くのよ？」

「今日・・・」

「はあ～～～？」

「行けるだろ？おまえなら・・・」

「・・・すごいね、あんたって・・・いつ決めたの、あたしって」モモは驚いた表情で聞いた。

「さっき。ハートのクイーンが出た時」

「はあ～・・・？」

「直感」

「ばっかじゃないの・・・」

「俺は直感で生きてる」

モモは優作の顔をまじまじ見た。本当に馬鹿じゃないのかと疑った。

「私は今日ボロ負けで、運なんかないのにベガスに連れてってギャンブルするう～？」

ナニ考えてんだかこの親父。なんか下心あるんじゃないの？」

優作はモモの顔を見ると首を横に振った。とぼけた男だ。

ここでもポーカークフェイスをしていた。

「いいわ。乗ったわ、その話。おもしろそう」

「あのさドレス持ってるか？」

「あるわよドレスくらい。結婚式の時のでいい？」

「ばっかっ、もう入らねえ癖に・・・あんのか？」

「う～～ん、多分あると思う。カラオケステージ用が」

「カラオケ？」

「うん、八代亜紀みたいな派手な奴がある」

優作は想像してみたが、紅白歌合戦しか思い浮かばなかった。

「まあ、いいか。じゃそれ持ってきて」

「着なきゃいけないの？」

「あ～そうしてくれって。ドレスコードがあるんだそうだ」

「ふ～～ん」モモはまさかあのドレスをアメリカで着るとは思わなかった。

なんだったら向こうでカラオケでも披露してやるかと考えた。

優作とモモがショットバーを出たのは夜が明ける5時くらいだった。

二人はお互いの家に戻り、そのまま空港へ直行した。

8時のエアラインカウンターは空いていた。

夏のバカンスをはずしたこの時期は観光客もいなく、たいがい席は空いているはずだった。

いきなりの予約なしのロス行き飛行機の座席は心配することなく空いていた。

出国手続きを終え、ロス行き飛行機に乗った1時間後には二人とも爆睡していた。

機上、何度か目が覚めたがその度、サービスのスコッチを喉に落とし込むとまた眠りについた。

西風の偏西風が強かったのか、いつもより30分近く飛行機はロスの空港に着陸した。

そしてそこから、アメリカ国内線のベガス行きに乗り換えると、今度は眠る時間もなく到着した。

空港を出るとすぐ砂漠の乾いた熱風が歓迎してくれた。

「あつ～～い」モモは嫌がるようにすぐエアコンの効いたタクシーに乗り込み

「さっ、さっさと腕試しに行こう」と言い出した。

「ホテルが先だろ。まあ～いいか。どうせホテルの下にカジノがあるはずだから」

ロスの空港から予約したホテルの名前を運転手に告げると、無愛想な黒人の運転手は車を出した。

ラスベガスの町はテーマパークのような街づくりをしていた。

大きなビルボードの看板には金髪のグラマーなお姉さんの笑顔。

ビルから飛び出したジェットコースターのレールの上を突然騒音を鳴らして走り抜ける嬌声。

カジノのショータイムのCM。大きな噴水の歓迎のような水飛沫。

観光客も多い。白人、黒人。黄色、日本の団体様。遊園地のような。

「ところで結婚式はいつあるの？」

「あさってだ」

「部屋は？」

「ひとつだ。どうせ帰らないだろ」

「ふ〜ん、あんたと同じ屋根の下か・・・」

ホテルは映画に出てくるような豪華な部屋ではなかった。

ただ、インテリアはおしゃれだった。

安いツアーのホテルよりはましだろう。

窓の向こうに火星のような砂漠が広がっていた。

何も無い薄茶色の広い空間。こんな所によく街を作ったものだ。

モモは映画を思い出した。

「バグジー」マフィアのギャングがたしかこの街を作ったはずだった。

主人公のウォーレン・ビーティはいい男だった。

今、私の横にいる男は2年前からの付き合いだが優作の苗字も知らない。

くわえタバコにポーカーが強いて事だけがよく知ってる。そして酒も。

免税店で買ったスコッチを早くもラッパ飲みしてる。

ウォーレン・ビーティまでは行かないが

まあ、その歳にしたらハンサムだからいいかとモモもグラスを探し出し、

優作から酒を注いでもらった。

「おい、モモ、おまえの軍資金はいくらだ？いくら持ってきた」

「へっ？そんなにないよ。金持ちじゃないんだから。5万円くらいかな」

「5万円か・・・それでいくら勝つつもりだ？」

「別に・・・勝てればいいかなあ〜と思ってるだけだけど」

「目標を持てよ。やる気が違うだろ」

「じゃ20万円。あんたは？」

「俺の目標は1000万円だ」

「はっ？馬鹿じゃないの」

「今、手元に100万円ある。俺の全財産だ。これを10倍にするつもりだ」

モモは優作の顔を見た。ホントに馬鹿か、ホントにギャンブラーだ。娘の結婚式が目的じゃないのか。

「あんた、それ全財産なんですよ。娘の結婚式に全部すったらどうするの？」

「その金は別に娘にやる金じゃね〜からいいんだ。祝儀は別に用意している」

「祝儀に手をつけたら怒るよ、私・・・」

「おまえなあ〜、ギャンブルする前からもう負けた気になってどうすんだ」

「それも、そうね、だけど・・・あんた・・・ホントにギャンブラーだね」

「人生もギャンブルと同じだろ。そういやモモは離婚した負け組みだったっけ？」

「うるさい」

優作は自分も離婚したが負け組みとは思ってなかった。男の場合は勝ち組である。根拠はない。ただ、離婚して自由を再度手に入れたから勝ち組なんだと勝手に思っていた。

「さあ、48時間のギャンブル開始だ。よしシャワーを浴びて着替えて戦闘開始だ」
そう言うので優作は、モモの前でさっさと裸になりシャワー室に消えた。
いきなり裸を見せられたモモは、優作の分厚い胸板にドキリとした。
案外、いい体格じゃん・・・。

二人でホテルの1階に下りるとスロットマシンが並んでいた。
はやる心を抑え、ホテルを出てエクステンジに両替しに行った。
ホテルより街の両替屋の方がレートはずいぶんよかったからだ。
クォーター＝25セントの小銭をずいぶん貰った。スロットマシン用だった。
こちらではいきなり現金がそのままスロットに使える。
チップもあるがホテルに並んだスロットマシンは現金仕様が多かった。1ドルコイン用もある。

日本のスロットマシンと違って現金決済だ。モモはスロット専用だ。
機械相手ならポーカーフェイスが下手でも大丈夫だからだ。

それと、バカラにルーレット。

これも笑顔とチップさえ上手にあげれば少々勝たせてくれる。

「当れば派手に喜べ」と優作から耳打ちされていた。

珍しい日本人のおばちゃんが陽気にルーレットで一喜一憂していると場が盛り上がる。
5万円以内なら笑顔でサービスしてくれる。そして、儲かった所でとっとと引き上げる。切り上げ方がポイントだ。

勝った同情なんか見せずチップを1枚でもあげりゃ十分だ。勝負は常に非情なのだ。
いかにして勝つか？頭を絞るしかない。

優作はブラックジャック専門だ。

これは駆け引きの世界とヨミだ。ディーラーとの運勝負というのが強い。

だから、ディーラーとの相性が問題になる。

時間はかかるが荒野の決闘よろしく一騎打ちとなる。

人間が絡んだ勝負は優作は強かった。

今までにギャンブル以外でも修羅場に近いものを経験したせいだろう。

そしてセンスがいる。ギャンブルのセンス、これはもって生まれたものだ。

駆け引きの糸を操るセンス。

負けているようでも大事な勝負の時には絶対勝つ。それを操れるものが勝ち残れるのだ。

午後1時に到着して、3時からぶっ通しで午前3時まで12時間、

二人は3件のカジノを廻り、モモは10万円の勝ち。

優作はなんと倍にして帰ってきた。

「あ～～ぶっ倒れそうだ。さすが本場は違う。ピリピリきやがる」

「すご～～い。10万円も勝ったよ。優作も凄いじゃん100万だよ」

モモは興奮して大はしゃぎだ。その陽気さがあれば明日も勝てるだろう。

優作はベッドに倒れるようにして眠った。よっぽど気を使ったのだろう。

「あら、もう寝たの？酒は？」

「・・・」

優作は目をつぶっていた。

モモは昼間の免税店のスコッチをグラスに移して飲むとシャワーに入るため裸になった。そして、シャワー室に入った。

優作はその様子を薄目を開けて覗いていた。

いい体してんじゃん・・・。

モモがシャワーから出てくると、今度は優作は完全に眠っていた。

バスタオルを巻いたモモは優作の顔を見て髭が伸びてるのに気づいた。

西部劇に出てくる荒くれ者の顔だ。そっとその髭を触るとモモは隣のベッドで眠った。

翌日は12時から戦闘開始だった。

モモは15万円から、優作は200万円から。

負けることは考えずカジノに入っていった。

賭けるレートを上げる分だけ、今日はきつくなることは優作はわかっていた。

しかし勝負だ。

モモはルーレットにはまった。新しい店なので、また昨日の作戦が使える。

あと目標の10万円なんとかがんばろう・・・モモは昨日より意気込みが違った。

そして勝負運はそういう時に限ってよろしくない。あっという間に5万円負けた。

優作も苦戦していた。なかなか波に乗れない。ギリ貧状態だ。

エースは来るのだが後が続かない。

モモは優作を見つけると傍に来た。

「どうなの調子は？」

「よくない。おまえは？」

「すぐやられちゃった」

二人はディーラーが配るカードを見ながら「今日は負けるのか」と弱気が顔を出した。

優作は何かを吹っ切るかのように、モモに突然

「モモ、おまえの陰毛くれないか？」と言った。

「はっ？」聞き間違いでなかったら、この人とんでもないこと言ってる。

「下の毛だよ。あるだろ。昨日見たんだ」

モモは昨晚、シャワーに入る時を思い出した。見てたんだ・・・

「この、どスケベ。ちゃんと勝負に集中しなさいよ」モモは顔が赤くなった。

「今、いるんだ。今が重要な時なんだ。1本でいいから」

「なんで、いるのよ？」

「競馬やってる連中は、みんなかみさんの毛を大事にしてるんだ。勝負に勝つためのゲン担ぎさ」

「私、あんたのかみさんじゃないし、ここで抜くのは恥ずかしい」

「今いるんだ。俺にはわかるんだ。ここで負けるとずるずる負けちまう。すぐに出してくれ」

「はあ～、今、ここで出してくれ？」

それで勝負に勝てるなら抜いてあげてもいいけど、今、ここでえ～・・・？

モモは優作の背中の方に回ると、もぞもぞと下着の中に手を入れた。プチッ・・・

こんなんで勝てるなら、何本でもあげるよ。だけど、恥ずかしい・・・

モモは抜いた自分の陰毛を確かめると、優作の目の前に出した。

ディーラーはこっちを見てる。

「おっ、ホントに抜いたんか。しないかと思ってた」優作は急に笑い出した。

「あんたが言ったんじゃないの」

「そうか、そうか・・・くっ・・・これがモモの陰毛か・・・」優作は大きく笑うのを堪えて我慢した。

そしてモモの指先にある少しカールした毛をすばやく取ると、自分のテーブルの目の前に置いた。

「あっ、そんなとこに・・・見られちゃう」モモは思いっきり恥ずかしかった。

隣の中国人の男が何か優作に英語で話しかけてる。

優作もそれに対して英語で何か答えてる。

中国人の男が笑いながらモモに親指を立てた。

何それ？私の話？もしかして私の毛の話？

それから中国人の男はディーラーに笑いながら早口でしゃべっている。

ディーラーは少し口元を緩めるとモモの顔を見た。そして、微笑む。

やっぱり私のことだ。絶対その陰毛の話だ・・・

「優作、あんた喋ったの？言ったんでしょ・・・」

「ああ、みんないい女房だなって言ってくれてる」優作は笑いながら言った。

テーブルの全員がモモを見て親指を立てた。「グッジョブ」

モモは赤面した。何がグッジョブよ・・・

恥ずかしくてモモはその場を逃げるように離れた。

1時間したくらいだろうか、優作がモモの所へやってきた。

モモは意外とレートが高いルーレット盤に座っていた。

「サンキュー、モモのおかげで勝たせてもらった。ほらっ」

優作はゴールドのチップを見せながらニコニコしていた。

「もう、ばかっ。恥ずかしかったんだからね」

モモはルーレットの玉の回転を見ながら優作に言った。

「どうだ、おまえは勝ってるのか？」

「なんだかポチポチだわ。いくら勝ったの？」

「300万くらいかな」

「ええっ～～凄いじゃない。まだするつもり？」

「いや、もうやめる。なんだか俺の勘がそう言ってる」

「あら、1000万までがんばるんじゃないか？」

「ギャンブルはそう、うまくいかないさ」

「へえ～～」

カラカラッと音がしてルーレットの玉が止まった。

モモの賭けてる場所を全部はずした所に玉は止まった。

残りのモモのチップは500ドルくらいが目の前にあった。

「なんだ負けてるのか。そろそろ切り上げるか」

モモは自分のバッグの中を開いてチップの計算を試してみた。

目の前も含めて1000ドルのチップがあった。

トータル5万円の勝ちか・・・目標には及ばなかったな・・・

「ねえ～、優作。優作の毛をくれない？」

「はあ～、俺の毛って、下の毛か・・・？」

「うん、私もゲン担ぎ。いいでしょ？」

「全部、黒に賭けるわ。有り金全部1000ドル」

「おまえもギャンブラーだな。しかし、ほら3回黒が続いてる。赤が出る確率が高い。分が悪いんじゃないか？」

「いいの。ほらルーレットが廻りだしたわ。早く抜いて！」

「「エッ、今すぐかよ」

「もう賭けたのよ。早くっ！」

優作は急いで自分のパンツの中に手を入れると、勢いよく引き抜いた。痛ッ・・・。

そして、モモが賭けた黒のチップの上に自分の陰毛とともに5枚の100ドルチップをすばやく置いた。

「Don't bet」

ディーラーのストップの声がかかる。カラカラカラ・・・

乾いた玉の音が響き、ルーレットの玉が不規則に飛び跳ねた。カラカラカラ・・・カツン・・・黒だっ！！

モモは小躍りした。体全身で喜びを表し、どうだと言わんばかりに優作の顔を見た。

「きゃ～っ、やった～・・・」

優作もまさか当たるとは思わなかった。モモにつられて喜んだ。

2倍の2千ドルのチップがモモの元に返ってきた。優作には1000ドルのチップが。

「あら、あなたも賭けたの？」

「ああ、これでおまえの目標20万円近くは行ったろう」

「貰っていいの？きゃ～、うれしい」

「今のはおまえの勝負だからな」

優作とモモは100ドルチップをディーラーに投げやると、二人してサンキューと言った。

「よし、帰ってシャンパンだ」

チップを現金に換え、お世話になったカジノを出た。

乾いた砂漠の風が熱いけど気持ちよかった。

まだ日が沈むには時間がある。結婚式も明日だ。

優作はモモに「せっかくだから、明日の予行練習をしよう」と言って、

二人でホテルに帰り、優作は真新しいスーツを、モモは派手なドレスを着てシャンパンを飲みに出ることにした。

「なんだか、気持ちいいなあ～」優作が言うと

「私も、凄く楽しい」と言ってモモは優作に抱きついてきた。

「おい、おい、カラオケおばちゃんがラスベガスで乱痴気か？」

「いいの、いいの、今日はお祝い」

二人はホテルの高層階にある、豪華なバーに入ってしまった。

そしてシャンパンを頼んだ。

細長く、薄いガラスのシャンパングラスは上品だった。

優作は「乾杯する前に、これ返しとくわ」と言って、

モモのカールした陰毛をテーブルの前に差し出した。

「きゃっ・・・」それはモモにとって見覚えのある自分の毛だった。

「恥ずかしい・・・」そう言うと、自分の毛を取りドレスの胸元の谷間に落としこんだ。

「後で、また、それ、貰ってもいいかい？」優作

「・・・いいわよ・・・」

砂漠の向こう側に日が沈もうとしていた。

二人にとって幸せなサンセットドリンクとなった。

(完)

中年スマッシュ

「中年スマッシュ」 ～君に届け～

高校生の卒業式の日、手紙をもらった。

一年後輩の女子からだった。髪が長くバドミントンが僕よりうまかった。

ラブレターだった。手紙のほかにギターのピックが入っていた。

プラスチックの三角形をした、ギターの弦を弾くやつだ。

そのピックにシャトルの羽の切れ端がテープで止めてあった。

僕は彼女のことをあまり気にしていなかったというのが本音だ。簡単に言えば彼女の片思い。

シャトルの切れ端の意味は、バドミントンを忘れないでね・・・ぐらいしか思わなかった。

でも、変わったプレゼントで印象に残った。

それから、ギターを弾くたび彼女のことを思い出した。

だけど、

そのうちギターも弾かなくなり、一緒に彼女のことも忘れてしまった。

僕は社会人になり、結婚もしたが、離婚も経験した。

45歳で一人になり、暇をもてあました。

近くの小学校の体育館で夕方になると、

同好会らしき人達でバドミントンをしている姿が、ガラス越しに見えた。

「パシン、パシン」というシャトルを打つ音がこちよく聞こえてくるので

つい、覗いてみることにした。

中年の男女が10人くらいでネットを挟み、楽しそうにゲームをしていた。

30代から50代くらいまで和気あいあいと言った雰囲気だ。

その中の中心選手というか、目立ってうまい女性がいた。

年齢は僕と同じくらいで、彼女がスマッシュを打つと糸を引くようなきれいな直線で

相手コートに突き刺さった。惚れ惚れするようなスマッシュだった。

次の週もシャトルを打つ音につられて、体育館を覗き込んでしまった。

また、あの彼女のスマッシュが気持ちよく相手のコートに突き刺さっていた。

ふとしたことから、僕はあのスマッシュを受けてみたいと思った。

まだ、できるんじゃないだろうか、でも、もう27年もやっていない。

だけど、あのスマッシュに立ち向かっていく時の快感はきっとあるはずだと思った。

僕は近くで見物してる同好会の人に、入会の話しをうかがわせてもらった。

さっそく、来週から参加させてもらう話をした。

中年大歓迎だった。

新しい久しぶりのラケットを買いに行くことにした。

カーボンファイバーのものすごく軽いやつが手ごろな価格であった。

昔と比べたら失礼だけど、ずいぶん進歩したものだ。

中年の腕には軽いほうが助かった。

久しぶりの感触だった。ラケットを振ると「ビュッ」と空気を切る音がする。

気持ちがいい。少しばかり少年時代に戻ったようだった。

その場で何度かスマッシュの体勢でラケットを振ってみた。

興奮が蘇ってくる。

僕はワクワクとした気持ちで、家に持ち帰り来週の体育館を楽しみにした。

翌週、僕は夕方7時からの町のバドミントン同好会に参加した。

自己紹介をすると、いらっしゃいの拍手をもらった。なんだか気恥ずかしかった。

一通りの準備体操が終わると、各二人に分かれて、大きくクリアの練習をした。

コートから端まで、高く遠くシャトルを打ち上げる練習だ。

僕はスマッシュのうまい、あの彼女と組むことになった。

僕が経験者だとわかると、レベルの同じくらいの人と組ませるようだった。

残念ながら、組んだ彼女のほうが僕よりうまかった。

クリアひとつでわかる。大きな綺麗な安定した軌道。乾いた心地よい音。

どれをとっても彼女にかなわなかった。そして、久しぶりの運動は僕の体が悲鳴を上げた。

ずいぶん体力が落ちたもんだ。高校生の頃までと行かないけれど

せめて、もうすこし……。息切れをこんなにするとは思わなかった。

彼女は笑っていた。

「大丈夫ですか？ひさしぶりなんですよ」

「あっ、ハイ、高校以来だったもんで、舐めてました」

「でも、他の方よりお上手ですよ」

「ありがとうございます」

それから1時間ほど二人で基本練習をした。懐かしいからだの動きだった。

額の汗が落ちるたび若返るような気がした。1時間もするとだいぶ感を取り戻してきた。

ダブルスのゲームをしようということになった。

僕はあの、最初にここで見たスマッシュに会えると思ったら武者震いがした。

久しぶりのゲームの緊張感もあったかもしれない。

相手コートに彼女が立った。お望みの設定だった。

相手のサーブ、ちょこんと来たやつを大きくクリアして、彼女がまた大きくクリアする。

僕のクリアは遠く届かず甘いところに上がった。

彼女は挨拶と言わんばかりに、僕の体めがけて、あのスマッシュを打ってきた。

速い！遠くで見るのとわけが違う。時速200kmぐらいのスマッシュが襲いかかる。

反応も出来ない。あえなく、シャトルが僕の体の胸辺りに当たった。

いきなりの洗礼だ。

「痛っ！」

「大丈夫ですか？」彼女は笑って近寄る。それで少し闘志に火がついた気がする。

「あっ、いえ、大丈夫です」気が引き締まった。

緊張感とスピード、瞬発力に瞬時の判断。だんだんワクワクする自分がいた。

気がついたときには、あっさりと彼女のチームに負けていた。

ゲームが終わり、握手をした。

すると、彼女は

「相変わらず、弱いんですね」と言った。

「ん？相変わらず……」

僕は彼女の顔を見た。覚えがなかった。どこかで試合したことあったか思い出してみる。

女性と試合したのは高校生以来だから……

「あ～、まさか……」

「やっと、思い出してくれました？同じ高校の弘美です」

「弘美ちゃん……ああ～弘美ちゃん……そうか、気がつかなかった」僕は驚いた。

「先輩だとすぐわかったけど、私の事、気づかないからコテンパンにしてやりました」と笑った

。

「だあ～、ごめん、ごめん。強い。強すぎる」

「あれから、国体にも出たことあるんですよ」

「え～、じゃあ、かなわないはずだ。速すぎて見えなかった」

「まだ、はじめたばかりだから、徐々に慣れてきますよ、先輩」

「いや、いや、遊んでた僕には君にかなわない」

「そう、先輩はバドミントンより得意なものが他にたくさんありましたからね～」と彼女は笑った。

44歳の彼女は昔の面影がなかった、と言うか、僕が昔はあまり気にしてなかったからだ。

髪も短くなり、こんなに美人だったかなと思うくらい大人になっていた。

正直、この時はラブレターをもらったことやピッグのことなんて思い出せなかった。

30年近くの月日は、青春の思い出さえ遠くのかなたに追いやってるみたいだ。

同じ歳くらいなのに彼女の体のばねは若々しさそのものだった。

僕とは10歳も違う気がした。

翌週もコテンパンにやられた。

その翌週も、まるでかなわなかった。

とり憑かれたように毎週、僕は弘美のスマッシュに立ち向かって行った。

1ヶ月ほどした頃、ようやく弘美のスマッシュをラケットに当てて返せるようになった。

弘美のスマッシュを受けることが、僕の快感になり、彼女との無言の会話のようだった。

僕もだんだん、昔ほどじゃないけど感を取り戻してきた。

弘美に向かって思いっきりスマッシュを打ち返した。それでも、あっさり返される。

なんともいえない連帯感が爽快だった。体の調子もいい。

バドミントンをやり始めて、新しく心の中に新芽が生まれるように何かが変わってきた。

1ヶ月も経つと、メンバーも顔見知りになり、いろいろバドミントン以外の話もするようになった。

やっぱり、僕は弘美のことが気になり、本人に聞けないことを聞いたりした。

弘美は1年前から、ここに通い、実力もあることから中心メンバーになってるそうだ。

弘美の家庭のことや私生活になると、みんな口を閉ざした。

何か聞いてはいけないものを聞いているような感じだったので、それ以来、聞かない事にした。

弘美はバドミントンに熱中していた。何かを忘れるように。

弘美のことを知りたいと考え始めたら、やたら気になった。

最初は弘美のスマッシュだけが一番の興味だったのが、今度は弘美自身を知りたくなった。

一心不乱に打ち込む弘美の躍動する体を目で追いかけてながら、彼女の人生を想像してみた。

僕との出会いはいつだったのか？それから国体選手に。それから・・・

何にも浮かばなかった。綺麗に高校時代からぼっかり空白が出来ている。

その人を知りたいと思うのは、恋の始まりに似ている。

どこで、何をして、どんなふう生きてきたか。空白のままじゃ心に何か棘が刺さったようだ。

僕は弘美のことをもっと知りたくなった。

その日の夜、バドミントンの練習が終わると僕は弘美を呼び出した。

「もう、すぐ帰らなくちゃいけないの？」

「えっ、いや1時間くらいなら大丈夫だけど」

「そこで、ビールでも飲んでいかない？」

「あたしお酒は無理。コーヒーくらいならいいけど」

僕は居酒屋の隣の喫茶店に彼女と入った。薄暗い店内はすべてBOX席だった。

「なんだか怪しいね、この店」僕は緊張をほぐすためおどけて見せた。

「先輩、変わりませんね。あの頃のままみたいですね」

「イヤイヤ、もうずいぶんおじさんだよ。ほらお腹も出てるし」

「でも、髪形も、顔もそう変わってないですよ」

「そうかな・・・ふけた気がするんだけど」

「そのまま少年が大人になったようです、先輩は」

「なんだか、うれしいな。僕は忘れていたのに気が引ける」僕は弘美の言葉に喜んだ。

「弘美ちゃんは結婚してるの？」あっさり聞いてみた。

「今、離婚協議中・・・」

「えっ、何か聞いてまずかったかな・・・」

「ううん、いいですよ。なかなか人生うまく行かないですね・・・先輩は？」

「僕はもう1回離婚の経験あり。そっちのほうでも先輩だ」僕は笑って、明るくしようと努めた

。

「離婚ってパワーいらしますよね・・・」

「そう、結婚の3倍はパワーがいると言われてるけど、僕は10倍くらい必要だった」

「えっ、そんなに・・・仲がよかったたんでしょよね、それくらい」

「仲がよかったら離婚なんてしないよ。その反対。もうドロドロだった」

「うちもドロドロです」と言って弘美は小さく笑った。

「離婚ってそんなもんだよ。離婚にきれいごとはないみたい」僕も笑ってごまかした。

「結婚の理由は好きだからと一つしかないけど、離婚の理由は数え切れないほど出てくる」僕は言った。

「うちの場合はDVなんです。だから、今は逃げてるの・・・」弘美が寂しく言った。

まさか、そんな理由とは僕は思ってなかった。少し沈黙したが、すぐ

「そうか・・・大変だね。で、離婚は出来そうなの？」と聞いた。

「裁判所からもうすぐ通達が来る予定。なんとかなりそうだけど・・・」

「だけど・・・？」

「追いかけて来やしないかと心配なの」

「ふ～ん、それで今は大丈夫なの？」

「彼の実家はここから遠い町だから大丈夫だけど、心配になる時がある」

「子供は？」

「もう成人してるし。海外に行ってる」

「へえ～そうなんだ・・・DVか・・・きついよね・・・」

明るく努めようとしたのに、泣かせてしまった。

バドミントンで爽快に動き回る弘美とは別人だった。僕は声をかけてやりたかったが出来ないでいた。

それから、なんとなく喫茶店を出て別れた。

帰ってから弘美のことが気になった。弘美の人生をつなげてみた。

空白の時間の弘美は悲しい顔をしていた。バドミントンの時とは対照的な顔をしていた。

その翌週は彼女はお休みしていた。

シャトルを打つ手にも力が入らない。なんだか気が抜けた練習日だった。

弘美を待っている僕がいた。あの力強いスマッシュを浴びたかった。

シャトルでの会話をしたかった。しゃべらなくても心が通う瞬間。ひとときのつきあいのようだった。

久しく恋愛してないことに僕自身気がついた。

この会いたい、待ち遠しい感情は恋愛のような気がした。

次の週は彼女は練習に来ていた。僕より早く来て体育館にモップをかけていた。

心なしか明るい表情だった。離婚が決まったのだろう。

何も聞かなかった。

また、いつものように二人で黙々打ち合った。

シャトルが行ったり来たりする度、彼女から返事をもらってるようだった。

大きくクリアしたシャトルは放物線を描いて、彼女の元に届く。

彼女もまた、大きくクリアして僕のところに届けと言わんばかりに、きっちりと僕をめがけて落ちてくる。

何度か繰り返すと、シャトルで話す彼女の声が僕に届いた。

「もう、大丈夫だよ」って僕に届いた気がした。

僕は彼女の元気なシャトルを「君に届け」と想って打ち返した。

僕達のシャトルは二人の間を何回も行ったり来たりした。

今度の日曜日は彼女をデートに誘ってみようと思った。

体育館にシャトルの羽の音がした。そして僕は思い出した。

卒業式の日にもらったラブレターとピッグに貼り付けられた羽の一部分を・・・。

(完)

春の風が吹いて

「春の風が吹いて」

新しいカフェが駅前のビジネス街の中にオープンした。

気の香りがするナチュラルな感じでいいデザインだ。

窓際のガラスに沿ったカウンターに座り、僕はぼんやりコーヒーを飲んで楽しんでいた。

春風が強く、街路樹が大きく揺れていた。

僕の目の前のガラスの向こうを歩いていたきれいな女性が、男性にぶつかり荷物を落とした。

よくある光景だが、落とした拍子に何枚かの紙切れが風に飛ばされた。

二人はあわてて荷物を拾っていたが、風に飛ばされた1枚の紙を見ることはなかった。

僕は飛ばされた紙の1枚の行方を目で追った。道路向こうの街路樹の中に落ちて挟まったようだ。

二人は頭を下げてお互いに謝っていた。

どうやら、飛ばされたあの紙のことは気がつかないみたいだ。

その彼女が目の前を通り過ぎようとした時、僕は急いで立ち上がり、

店の外に出て彼女を呼び止めた。

「もう1枚、何か飛びましたよ。俺、そこで見てたんです」

「あら、すみません」

「俺、取って来ますから待っててください」

「ほんとにすみません」

僕は道路を渡り風に飛ばされた紙を拾いに行った。

飛ばされた紙は予想通り街路樹の中にあった。

その紙は写真だった。

彼女のほうを振り返り、ありましたよという形で手を振った。

道路を渡ろうとすると車が長い間途切れなくて続いた。

僕はその写真を見た。

「えっ、この女の子は昔の同僚だった女の子だ」僕はすぐわかった。

もうずいぶん会ってないけど間違いない。

今、道路向こうで待ってる彼女はどうやら友達らしい。二人の笑顔が写真の中にあった。

僕は車の流れがようやく途切れて彼女の元に戻った。

「ほんとにありがとうございます」

「あの～、すみません。ちょっと写真見ちゃったんですけど、この彼女、増田さんですよ」

「えっ、ハイ・・・」彼女は驚いた顔をしていた。

「実は昔、同僚だったんです、彼女と。お友達ですか？」

「あっ、はい。陽子さんの知り合いですか？」

「そうそう、増田陽子さん。俺の隣のデスクだったんです。今は、ご一緒ですか？」

「ええ、今はそこのビルの6階。一緒に働いています」

「いや～、偶然だな～。後で覗きに行こうかな？」

「お電話させましょうか？名詞か何か、ありますか？」

僕は名刺を1枚彼女に渡した。

「あの、お名前よろしいですか？」僕はきれいな彼女に聞いた。

「私、美山といいます」

それから、彼女は写真の札を言うと、先ほど指差したビルの方向に歩き出した。

黒いスーツの後姿がとても様になっていた。歩き方が颯爽としていた。

残り香が漂うようないい女だと僕は思った。ビルの中に入るまで見つめ続けた。

カフェに戻ると僕のコーヒーカップはすでに片付けられていた。

辺りを見回しても誰も僕に関心がなさそうだ。

僕は仕方なく店の外に出て街を歩いた。

その日の夕方、増田陽子からの携帯が鳴った。

「先輩、お久しぶり。聞いたよ。美山さんから。。。偶然だね」

久しぶりの明るい陽子からの声だった。

「おう、久しぶり元気そうじゃないか。どう、うまくやってるそこは」

「まだ1年よ。渡り鳥みたいなものだから・・・先輩は？」

「ああ、今は、一人で仕事やってる」

「昔から先輩、一匹狼みたいなところがあったけど独立したんだ」

「まあな。独立といっても、社長兼平社員だ。フリーでやってる」

「美山さん、先輩のこと男らしい人って言ってたよ」

「そうか。うれしいな。あの美山さんも素敵な人だな。結婚してるの彼女？」

「バツイチ独身よ。わずか3ヶ月で離婚したんだって。先輩誘ってみる？」

「えっ、ほんとか？うれしいな」

「写真を拾ってくれたお礼よ。今度セッティングするね」

「おう、サンキュー。楽しみだな」

「じゃ、また連絡するね」

陽子の電話はそこで切れた。

「ふ～ん、バツイチ独身か・・・」僕は興味が湧いた。

4日後に陽子の電話はかかってきた。

「こんにちは先輩。急だけど今夜あいてる？」

「ああ、大丈夫だけど」

「7時にセラトンのバーラウンジに来ない？目当ての美山さん、いるわよ」

「行ってもいいのか？」

「来たいんでしょ」

「ああ」

「そこは先輩のおごりだからね。たくさん飲んじゃうから」

「おいおい、そんなに儲かってないよ」

「冗談よ。1杯は私達からのおごり。写真のお礼よ」

「二人だけでいるの？」

「そう、先輩含めて3人。いいでしょ」

「うれしいな。ありがとう陽子」

「どういたしまして、いつかのお礼」

「いつかの？何かしたっけ？」

「先輩優しいから、覚えてないのよ。私は覚えてるけど」

「そうなんだ・・・」

「これで借りは返したからね・・・」

「訳がわからないけど、まあ、いいや。サンキュー」

「じゃ7時にね」

「ああ行くから」

陽子の明るい声が電話を切ると消えた。

夕方7時になると雷を伴った強い雨が街中覆った。

風も強く吹いて、春一番らしいというニュースが流れていた。

タクシーでシェラトンのバーラウンジに行くと二人はカウンターで飲んでいた。

「こんばんは」僕は二人のそばに近づくと挨拶をした。

美山さんと陽子が笑い顔で振り返った。

陽子の顔を見るのは久しぶりだった。4年前だから、もう彼女も32歳になるのか・・・

久しぶりの陽子は大人っぽくなっていた。昔とずいぶん変わっていた。

30を過ぎると女性は妖しい何かを身にまとう。

陽子の人生に何があったのかは知らないが、ずいぶんいい女になったもんだと感心した。

「陽子、変わったなあ～」

「あら、どんなふうに？」

「よくなった」

「あら、ずいぶんね。もっと言い方あるでしょ」陽子は笑った。まんざらでもなさそうだ。

「こちら美山さん。この前あったでしょ」

僕は美山さんの顔を見ると挨拶した。

陽子は椅子を降り、美山さんとの間に席を設けてくれた。そして陽子は

「今日は美人に挟まれて飲めて、先輩幸せだね」と明るく調子に乗った声で言った。

僕は美山さんと同じものを注文した。

ペパーミントが効いた、ショートカクテルだった。

偶然にも彼女のピアスは同じ深いグリーンの光る石が装飾されていた。

僕が話しながら彼女の耳元をちらちら見るものだから、横から陽子が

「先輩、落ち着かないね。目がいやらしく動いてるよ」と声をかけてきた。

「なに言ってんだ。耳元のピアスがきれいで見とれてたんだ」

「そうかな、うなじの辺りばかり見ていた気がするんだけど」

「子供は黙ってろ。大人の話は色気があるほうがいいんだ」

「私だって、もうじゅうぶん大人ですから」

「そうか・・・辛い恋でもしたか？また、ふられたのか？」

「反対です、最近はずっとばかりですよ～だ」

「ほお、一人前になったな。でも色気じゃ美山さんに負けてるぞ」

「美山さんは特別よ。女の私でも好きなんだから」

「あら、この先輩は陽子ちゃんのことよくわかってないみたいね」と美山さんは言った。

「昔から、わかってないんです先輩は」

陽子はそうだそうだと言わんばかりに美山さんの言葉に反応した。

「そうか？俺が一番気にしてあげたのはお前だぞ。一番厄介者で・・・」

「先輩、私厄介者だったんですか？」

「いや、まあ・・・気にしないと何をしでかすか心配で・・・」

「あら、ずいぶん仲がよかったんですね」と美山が言った。

「いや、そうでもないですけど・・・」僕は陽子と仕事をしていた時を思い出した。

隣のデスクにしてもらったのは僕の提案だった。

案外いい才能を持っていて、彼女のクリエイティブな発想は僕を刺激した。

まだ仕事は上手には出来ないけど、光る何かを持ち合わせていた。

「ところで、陽子。結婚はまだなのか？」僕は陽子に聞いた。

「先輩が置いてけぼりにしたんじゃないですか・・・」

「ん？なにを言ってんだ」

「突然先輩やめたじゃないですか・・・」

「あ～上司ともめてな。カッとしてしまったんだ」

「どうして、辞めること言ってくれなかったんですか」

「それと、お前の結婚とどう関係あるんだ？」

「私、先輩と結婚すると心に決めてたんですよ」

「・・・」

「先輩も『ああしよう』と言ったんですよ」

「陽子。。。お前酔っ払った？」

「まだ3杯目です」

「嘘つけ！酔ってるぞ・・・お前、そんなに飲めたっけ？」

「勉強しました。先輩がいなくなって」

陽子はすでに酔っていた。顔も酔った顔をしていた。

美山さんは席を立つと、僕の肩を叩き、

「先輩は後輩の面倒、ちゃんと見ないといけませんよ、最後まで」と言って、コートとバッグを取り「先に帰るね、陽子ちゃん」と言ってレジに向かった。

「あの～」と声をかける間もなく美山さんは去っていった。

僕は酔った陽子とカウンターに並んで二人になった。

陽子は下を向いてベソをかいていた。

「泣くなよ陽子。久しぶりに会えたんじゃないか」

「先輩・・・うれしいっす」陽子は抱きついてきた。

「おい、おい、待て」僕は慌てた。

「先輩、こんな偶然、天使の贈り物と思わないんですか？」

「思わね～よ」僕は陽子を引き剥がし、椅子に座らせた。

昔から、酒は弱かったけど全然強くなってないみたいだ。

「いい女になったけど、みっともないぞ。酒に溺れちゃ」

陽子は聞いてないのか、椅子の上で下を向いてぐったりしてる。

「おい、陽子。大丈夫か？だいぶ酔っ払ってるぞ」

陽子の肩を揺すってみた。力が入らないのかぐったりしている。

完璧に酔っ払いだ。

美山さんは帰るし、陽子の酔っ払いは預けられるし・・・

とんだ一日だと僕は思った。

眠そうにしてる陽子の肩を抱えながら、店をあとにした。

外の空気を吸わせ、少し正気になったところで陽子に聞いた。

「陽子、送ってやる。家はどこだ」

陽子の言ったマンションは知っていた。わりと僕の近くのマンションだった。

タクシーを拾い、陽子のマンションに向かった。

マンションの玄関に着くと、寝ていた陽子を起こした。

完璧な酔っ払いだ。本当は何杯飲んだのか・・・

「ようこ、ようこ、着いたぞ。何号室だ？」

「・・・・・・・・号室」

「ほら、開けてやるから鍵、貸せ」

陽子はバッグの中から鍵を渡すともたれかかってきた。

「だめえ～先輩、部屋まで送って・・・歩けない・・・」

僕は仕方なく部屋まで送った。

部屋に入ると女の子らしい部屋だった。

リビングのテレビの上に見覚えのある写真が飾ってあった。

陽子と僕のツーショットの写真だった。

お互い4年前だから、ずいぶん若い。

「そうか・・・知らなかったな。。。陽子が俺を好きだったなんて・・・」

僕は陽子をソファに寝かせると、静かにドアを開けて帰った。

あくる日午後、陽子から電話があった。

「先輩ごめんね。昨日は・・・美山さんとのデート邪魔して・・・」

「おう、もう大丈夫か？ずいぶん死んでたぞ」

「もう1回セッティングしてあげるから、今度は邪魔しないし・・・」

「陽子・・・・・・・・もういい美山さんとは」

「えっ、なんで・・・」

「陽子、今度の日曜日あいてるか？」

「うん・・・・・・・・」

「デートしよう。そして聞きたいんだ。俺が『お前と結婚しよう』と言った話を」

「覚えてたの？」

「覚えてない。昨日のお前と同じように酔っていたのかも・・・」

「・・・・・・・・」

「陽子、お前、俺のこと好きなのか？」

「うん」

「ずっと前から好きだったのか？」

「うん」

「だったら、俺達じゅうぶんデートする理由がある。。。そう思わないか？」

「うん」

「一緒にデートの約束してうれしーか？」

「うん」

「おまえ、『うん』しか言わね～な」

「うん・・・・・・・・」

陽子が泣いていたかどうかは知らない。

飛ばされた写真のあの日と同じように春の風が吹いていた。

(完)

中年黄昏流星群

「中年黄昏流星群」

「ねえ 黄昏流星群っ知ってる？」

僕はバーのカウンターで、先ほど知り合ったばかりの隣の女性に聞いた。

二時間前に知り合った彼女は話がよくあった。

音楽の話、スキャンダルの話、とりとめない話、何をしてるかどこに住んでるか、結婚してるのか、

よくわからない部分があるからこそ会話が弾む。

若い時は意識しすぎて、なかなか話しかけられなかったが、中年になると人恋しいのかすぐ話しかけたくなる。

同じカウンターに座れば同じ仲間じゃないけど、うちとける気になるのは年老いた厚かましさのせい？

かもしれない……。

「えっ 知らない 何それって？」

四十代の半ばぐらいだろうか、品のいいワンピースが似合ってた。

「コミックの話、コミックとか読みます？」

「いいえ ぜんぜん。。。」

カウンターには彼女と僕のグラスしかもうなかった。

午前二時を過ぎるといつも賑わう店もぐっと客足が少なくなる。

僕らが最後のお客となってしまった。

マスターはグラスを拭き閉店の準備を始めた。

「黄昏っていうのは、もう陽が沈み暗くなりかけようとする頃でしょ。ちょうどそれを作者は「中年」にみたてたんだな。

それから、流星は一瞬だけ煌めくでしょ、だからたぶん最後の恋やときめきを表現してつけたんだと思う。

説明はないけどね。恋する中年の人達って云う意味でつけたんじゃないかな、そのタイトル」

「へえ～じゃ私、ぴったり。黄昏流星群だ」

「なんかあるの？ 中年のときめき？」

「ううん、願望だけ」

「じゃ おんなじだ僕も願望ありあり」

「みんなそうなんじゃない？ 友達の主婦も恋をしたいって言ってるし……」

「主婦が恋したら不倫じゃない？」

「不倫も恋のうちなのよ。それにできないと思うから憧れるところもあるのよ」

「ふ～ん、じゃ世の中の女性はいつでも恋愛願望ありってわけだ」

「たぶん 当たってると思うわ」

「男も女も夢を見たいんだな。流れ星のように一瞬だけ輝きたいと・・・毎日は疲れるからね」

「そんなもんね・・・」

隣の彼女は、もちろん一人で来てた。

マスターは知ってるらしく僕は初めてだった。

「ねえ～、黄昏流星群ごっこしない？」彼女が言った。

「いいねえ～、どんな？」僕は笑った。

「なんか、ときめかせてよ」

「いきなりですか・・・う～ん、おもしろい」

突然の難問にチャレンジするのが僕は好きだ。答えを出したくなる。

「ロマンチックじゃないと タイトル負けしてしまうなあ～」

僕は考えた。

午前二時の深夜、出会って間もない中年の二人。

シチュエーションはバッチリだ。

「でも条件がある。君が僕に好意を持っていてくれないと困る」

「いいわよ、その条件で・・・」

「そして笑わない。これは演技だから役者はしらげちゃだめだ」

「了解！」

「じゃ、今からお店を出よう。そして手をつなごう」

「いいわよ」彼女は楽しそうにしてる。

僕らはマスターに勘定をしてもらい店の外に出た。

そんなに外は寒くなかった。

もうすぐ本格的なクリスマスシーズンが始まる。

タクシーの赤いバックライトがツリーのライトのようだった。

僕はポケットの中に彼女の手を引き寄せつなぎ合った。

あたたかい手がふれあい、ちょっとドキドキした。

「恋人同士に見えるかな？」彼女が聞いた。

「中年夫婦って見られてるんじゃないの？」

「え～、じゃロマンチックじゃな～い」

「そんな見せかけで、実は、さっき知り合ったばっかしなんだというのがドラマになるんじゃない」

「そうね、見せかけじゃなく二人の関係ね・・・」

「知り合ったばかりで、こんな事するのが十分ロマンチック。そうじゃない？」

「そうね、ちょっとドキドキしてるわ」

「僕のこと好きかい？」

「ふふふ、ええ好きよ」笑いながら彼女は言った。笑顔が素敵だった。

「じゃ、この道の真ん中でキスしてもいい？」

「・・・・・・・・」

「じゃ、この道の真ん中で好きだって叫んでもいい？」

「いいわよ。でも恥ずかしくない？」

「役者だから平気さ」

「じゃ、言って御覧なさいよ」

「よし、言うよ！」大声で言おうとした途端、

「だめっ、だめっ」と言ってさえぎった。

「恥ずかしいからやめて・・・」笑いながら呆れていた。

「あなたって、変な人ね」

クリスマスの灯りが綺麗に輝いてる。

彼女の楽しそうな顔を見ていると僕まで楽しくなった。

お互い手を離さず腕を組み、海に続く川沿いの道を歩いた。

ネオン看板が水面に揺れ、ホテル街の灯りがなまめかしく見えた。

「どこに行きたい？」僕が聞いた。

「あそこのホテル・・・」

「・・・・・・・・」

「冗談よ。びっくりした？」

「びっくりした・・・演技じゃないかと思った」

「演技だから言えるのよ。普段言えない言葉が」

「それって言うてみたくなる時があるってこと？」

「あるわよ・・・」

「へえ～ 妬けるな・・・・・・・・」

僕らは大きな橋を渡り、屋台が並ぶ道に出た。

今夜はもう、すでに客は少なくなり店をたたむところもあった。

彼女は甘えた声で、

「いい男が連れて行く場所は決まっているんでしょ？」と言った。

「ああ もう決めてある」

僕は川沿いの道から外れ、公園の大きなイチョウの木の下に連れてきた。

すでに大部分の葉が落ちあたり一面、街灯に照らされ黄色の世界だった。

「雪景色みたい」彼女は喜んでいた。

このイチョウは百年以上の年月が経っている。

この辺りでは知られた大銀杏だ。

大きな木の下に来ると、子供のような気になるから不思議だ。

「ここは僕が好きどころの一つ」

「すご～い。いきなり別世界ね。よく知ってるわね」

「ああ、小さい頃からここで遊んでた」

「へえ～、じゃこの辺のガキだったんだ」

「そういうこと。。。」

僕はイチョウの落ち葉を彼女の肩に乗せ始めた。

「なあ～に？」

「おまじない。小さい頃やってたんだ」

「どんな、おまじない？」

「知りたい？」

「もちろん知りたい」

「このまま君が僕を好きになってくれますよ～に・・・と」

僕達は見つめ合って笑った。

ビルの谷間にあるこの公園の空は晴れていたが、街の明かりで流星は見えそうでなかった。

「じゃ、これで黄昏流星群ごっこはおしまい」僕は言った。

「え～、もう終わっちゃうの？」

「ここで終わるからロマンチックなんだ」

彼女は残念そうな顔をしていた。

そして、

「そうね・・・まだ長くいたかったけど・・・ありがとう」と彼女は言った。

「どういたしまして・・・」

僕は彼女のそばに立ち、唇にキスをした。

短いキスだった。

僕達の流れ星が流れた。短い閃光を放って。

中年のお遊びはこれくらいで切り上げた方がいい。

僕と彼女はイチョウの木の下でさよならをした。

明日以降 会えるかわからない。

でも、

どこかで、もしまた会えたら続きは長くなりそうだと思った。

(完)

海峡花火

「海峡花火」 ～海を隔てて愛し合う～

僕と彼女は海を隔てて住んでいる。

毎年夏になるとその海峡を挟んで競い合うように花火が打ちあがる。

今は冬だから見るには、あと半年の時間が必要だ。

彼女とは去年の秋から知り合った。ブログの中からだけだ。

電話番号は知っているが、かけないことにした。

メールの交換のほうが、なんとなく長く続けられそうだったからだ。

電話だったら、いきなりさほど知らないのに心の中まで話せない。

メル友というのか、これでじゅうぶんだった。

顔写真も交換した。

僕にはもったいないくらいのショートカットの美人だ。

いつか会いたいと思ってるが、まだ機は熟していない。

メールは他愛もないことから深刻なことまで。

でも、そこまで突っ込んだ話はしないことにしている。

なんとなくがいいからだ。

なんとなく好き。

なんとなくいてくれるといい。

なんとなくメールが来ればいい。

なんとなく気にかけてくれればいい。

なんとなく愛した気分になるのがいい。

なんとなく愛されてる気分になるのがいい。

中年になると生きてる残り時間が少なくなってくる。

燃えるような恋の願望はあるけれど、燃え尽きて灰になってしまうのは厭だ。

穏やかな毎日に

なんとなく彼女の・・・彼女がいればいい。

いずれ会う日が来るのであろうけど、それまでこの関係を楽しみたい。

果物の木の芽が出て、枝が大きくなり、葉が増え、花が咲く。

そして

花は虫達の協力により、果物の小さな実をつける。

今は、まだ小さな実みたいなものだ。

かじれば苦い汁が出る。食べられなければ捨ててしまうしかない。

若い時だったら食べていたかもしれないが、

大人になると、食べごろの時期を知っている。

いろいろ食べた経験から学んだ知恵なのだろうけど、
まだ熟していない。
二人の関係は。それは、よくわかる。
彼女もわかっているらしい。
なんとなく好きな人。
なんとなく彼氏。
なんとなくそばにいて欲しい。

恋の定番は独り占め

どうしても、その定石を打ちたくなる。
だけど、いつもその手じゃ通用しなくなる。
自分自身さえ、同じ手法じゃいけないのはわかっている。
だから、
今度は手を変えてみる。
長く続けたいために・・・
愛し愛されたいために・・・

そんな彼女から2月の初旬、小包が送ってきた。軽い小さなダンボールの箱だった。
配達人にサインを書かされると「はい、どうぞ」と受け取った。
僕はダンボールの箱をあけた。
そこには、また小さな箱があり、中にはエアークッションで包装した
普段売ってないような、ちょっと大きめの花火があった。
結構迫力がありそうな花火だった。
送り人は彼女だ。
手紙が添えてあった。
「2月14日バレンタインデーのチョコはあげません。
糖尿で死んだら厭だからです。
その代わりに、この花火を差し上げます。
普段小さなことで悩んでいる、大きな私の気持ちです。
夏の花火が打ちあがる場所にお互い行きませんか？
そう私はこちらから、あなたはそっちで。
午後8時 もし、私のことがなんとなく好きだったら
時刻どおりに打ち上げてください。
私も、なんとなくあなたが好きだったら花火を打ち上げます。
夏の花火大会まで待てないので思いつきました。
バカな女のお遊びに付き合ってください」
僕は笑った。

花火で愛の確認？ 僕は彼女のジョークが気に入った。
ますます好きになってしまった。
その夜、久しぶりにてるてる坊主を作った。
バレンタインデーにふさわしくピンクの紙で。

2月14日は晴れてはいないが、風もなく海峡の向こう側まで見渡される日だった。
しかし、夕方暗くなると霧がかかりやすい地帯なので心配だった。
防寒具を着込んだ僕は、花火打ち上げ場所の埠頭まで車で行った。
冬の寒空の上に、少しだけ星が見える。霧は出ないようだ。

後15分で約束の時間だ。

僕は車から出て、花火を打ち上げられそうな場所を探した。
こんな寒い冬の夜は誰も埠頭にはいない。どこでもよかった。
僕のカーステレオからは好きな音楽が流れていた。
それに合わせて僕も口ずさんでいる。楽しい夜だ。
電話をかけようかと思ったがやめた。

無言の花火の会話に電話は無粋だ。

午後8時、子供のように僕はワクワクして導火線に火をつけた。

ビシュワーツ・・・すごい音がして花火は打ちあがった。

想像以上で驚いた。

花火は彗星のような尾を引いて、高く上がると

そんなに大きくはないけど火花の花が開いた。パンッ！と音がした。

この大きさなら見えるかもしれない。

一瞬のきらめきのあと、花火が海風に流されて消えた。

「すげえや。。。」僕は声が出た。

彼女はこのことを知ってるんだろうか。。。少し不安になった。

僕は向こうの岸壁から打ち上がるだろうと待った。

3分が過ぎ、

5分が過ぎても花火は見えなかった。

小さくて見えない？ そんなことはないだろう。。。。

それとも、嫌いになった？ ただの冗談だったのだろうか。。。。

その時、電話がかかって来た。彼女からだった。

「私です」久しぶりの彼女の声だった。

「花火見えたわ。ありがとう。。。」

どうして打ち上げてくれないの・・・と僕は言いたかったがやめた。

「あのね、私の花火、導火線に火が点かないの・・・

打ち上げたいんだけど点かなくて」

僕は笑った。

「ハハハ、そうか、僕はまた君が僕のこと好きじゃないかと思った」
安心した僕がいた。

「OK！僕がそっちに行くよ。打ち上げたいんだったら」

「うん、お願い。来て」

「じゃ15分しないと思うから待ってて。場所は夏の打ち上げの所？」

「そう、埠頭のところ」

僕は車を飛ばして、大きな橋を渡り、彼女の住む側に行った。

先ほど打ち上げた場所の対岸の埠頭に彼女はいた。

初めての対面だ。

僕は彼女の名前を読んだ。

ショートカットの美人はこちらを振り向いた。

「ごめん、恐くて、ほら」と言って花火を僕に差し出した。

導火線が短く切れていた。

僕はまだ、これくらいなら大丈夫と判断した。

「初めて、会って、頼み事かい？」

「ごめんなさい・・・初めてじゃない気がするし・・・」

「そうだね。。。よく知ってるからね僕達」僕は笑った。

「この花火打ち上げたいの？」

「うん」

「花火を上げたら、僕のことなんとなく好きだって告白になるんだよ」

「うん。。。」

「よし、あげよう。。。危ないからどいててね」

僕は彼女の花火を海側近いところまで持っていくと

ポケットの中からジッポーのライターを取り出した。

風が吹いても炎が消えない優れものだ。

先ほど、彼女に告白した花火と同じように、今度は彼女の花火に火をつけた。

ビシュワーツ・・・先ほどと同じようにすごい勢いで飛び出した。

花火は流星のように冬の星空に吸い込まれていった。

そして、まあい火花の花が咲いた。

彼女を見ると拍手をしていた。僕は近寄り・・・

「あらためまして。。。しっかり告白受け取りました」と言った。

彼女は僕の胸に飛び込んできた。そして

「こちらこそ、はじめまして。私もあなたの花火見ました。うれしかったです」と言った。

僕達は星の下でキスをした。

(完)

あとがき

あとがき

ショートラブストーリーは体験談ですかと聞かれる

妄想に決まっている

いくつもの小説のような恋をしていたら

今頃はプロの結婚詐欺師だ

しかし

恋愛は詐欺のようなものかもしれない

「騙すなら最後まで騙してね・・・」

ほとんどの女性の希望の言葉だ。。。

「はい、頑張ってみます！」

恋愛詐欺師には似合わない殊勝な言葉だ。。。ごはん

5分で読める大人のショート・ラブストーリー

<http://p.booklog.jp/book/25839>

著者：海野ごはん

著者プロフィール：<http://p.booklog.jp/users/uminogohan/profile>

発行所：ブックログのパブー (<http://p.booklog.jp/>)

運営会社：株式会社paperboy&co.

感想はこちらのコメントへ

<http://p.booklog.jp/book/25839>

ブックログのパブー本棚へ入れる

<http://booklog.jp/puboo/book/25839>